

1989
3

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1989年3月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月間——イタリア語、英語、オランダ語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
 十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット
 顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ウィルコックス
 編集長：ヒュー・W・ピノック
 教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン
 編集主幹：ブライアン・K・ケリー
 編集副主幹：デビッド・ミッチェル
 編集主幹補佐：アン・レムリン
 編集主幹補佐/こどものページ：
 ディエーン・ウォーカー
 アート・ディレクター：M・マサト・カワサキ
 デザイナー：ジェリー・クック
 制作：シドニー・N・マクドナルド、レジナルド・J・クリステンセン、ジェーン・アン・ケンブ、ティモシー・シェパード、スティーブン・テイトン
 配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1989年3月号第33巻第3号
 発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 〒106東京都港区南麻布5-10-30
 電話 03-440-2351
 印刷所 株式会社 精興社
 定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
 半年予約1,100円(送料共)
 普通号150円, 大会号350円

International Magazine PBMA 8903JA
 Printed in Tokyo, Japan.
 Copyright © 1989 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

The Seito no Michi is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito no Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

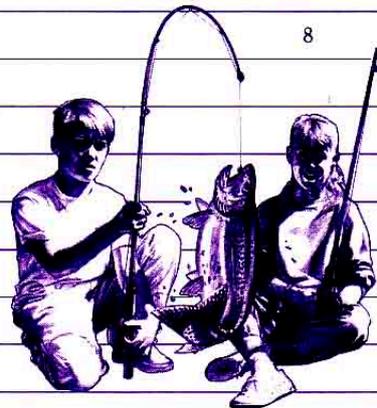
●——もくじ

復活祭によせて	大管長会	2
大管長会メッセージ——		
キリストの象徴	ゴードン・B・ヒンクレー	3
主の聖餐を理解する	デビッド・B・ヘイト	8
質疑応答 断食	J・ロジャー・フルーマン	15
聖餐	レックス・W・オールレッド	16
ひな菊から学んだこと	アン・レムリン	17
メシヤへの道	ジェフリー・R・ホランド	19
心を変えた牧師	ラルフ・モーテンセン	25
二階の広間で	マービン・K・ガードナー	27
霊の谷間	キャロリン・J・ラスマス	29
人々の祈りに支えられて	ダイアナ・ハドソン	30
家庭訪問メッセージ——		
全世界に出て行って		31
信仰の不一致に悩む夫婦へ	レノン・クロスナー・ヒューレット	32
家庭看護——		
脱水症の手当て		36
青少年のページ		
記憶	カーロス・E・エイシー	38
疑問の余地なし	ジュネビエーブ・ファン・ワーヘネン	43
おじいさんの3人の息子	トーマス・J・グリフィス	45
希望のメッセージ		48

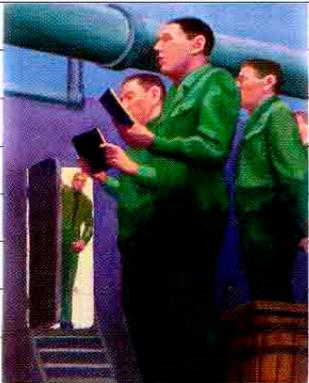
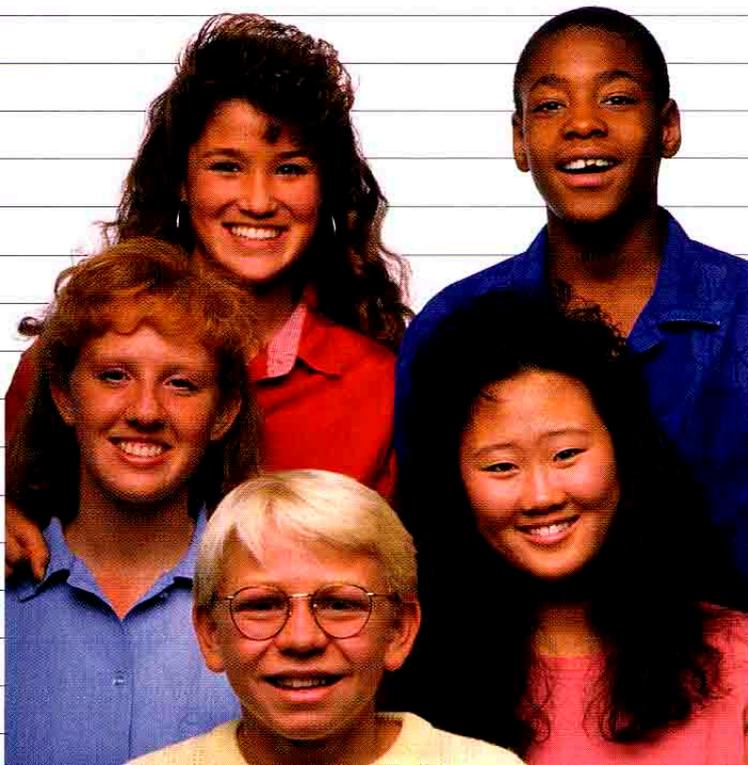
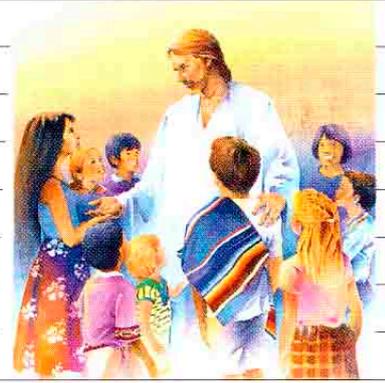
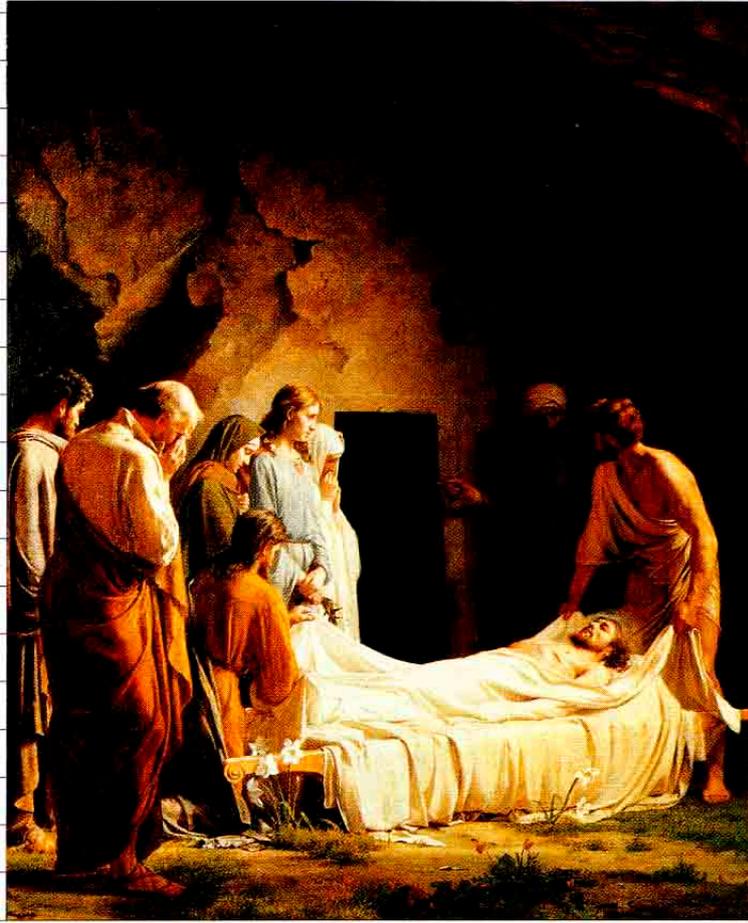
こどものページ

聖典からの物語：

ニーファイ人をおとずれたイエス様	2
やさしい友だち	4
せいさんにかんしゃする	7
あらしをしずめたイエスさま	8

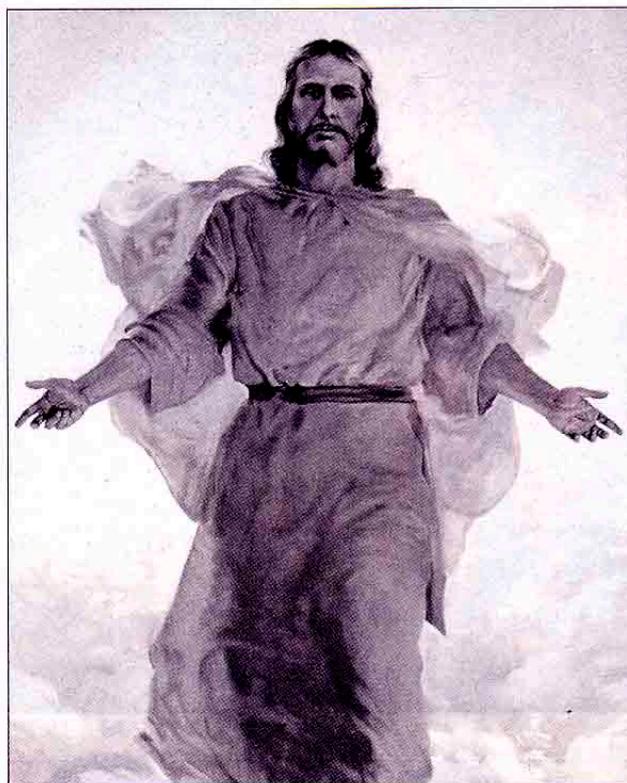


表紙：「わたしを記念するために、このよ
うに行ないなさい」ハリー・アンダーソ
ン画。© パシフィック・プレス出版協
会より許可を得て掲載



復活祭によせて

大管長会



私たちは、キリスト教世界の人々が、主イエス・キリストの犠牲と復活に対して特別な敬意を示す神聖な時期を迎えるに当たり、これまでになされてきた数々の証に加え、確かに主が「道であり、真理であり、命である」ことを、改めて厳かに証したいと思います。イエス・キリストは約束のメシヤ、贖い主、平和の君です。主の教えと模範に従うことなしに、世に真の平和の到来を待ち望むことはできません。

今、世は春を迎え、大地も、そして木々や草花も、冬の間の死の眠りから目を覚ましています。春は救い主の復活を象徴する季節です。春が新たな希望を呼び起こし、新しい命をもたらすように、イエス・キリストの復活も、人類に希望と命をもたらしました。約2千年前のこのすばらしい出来事は、みずから罪を克服し、キリストの模範に従って生きようとするすべての人に再生の機会を与えてくれま

した。

私たちは、キリストのみたまが全地の人々、特に国々の指導者の心に働きかけるよう強く祈っています。そして人々が神のその働きかけを敏感に感じとり、平和と兄弟愛の精神をもって隣人と暮らすようになることを望んでいます。

また、すべての人が救い主の贖罪しよくざいの意義をさらによく理解できるようになることを願っています。救い主は私たちにひとつの計画、すなわち命の道を与え、それによってこの世と次の世において、個人としても家族としても平安と真の幸福を見いだせるようにしてくださったのです。

エズラ・タフト・ベンソン
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン

キリストの象徴

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

新しい神殿が完成したり、既存の神殿の改装が終了すると、献堂式に先立って一般に公開され、その内部を見てみたいという人々が招かれます。

ある神殿が一般に公開されたときのことです。全部で25万人ほどの見学者がいましたが、最初の日にはほかの教会の聖職者が特別に招待され、何百人もの人が訪問してこられました。私は、その見学が終わってから、彼らから質問を受け、それに答える責任を与えられていました。

何か質問があれば喜んでお答えしますと言うと、多くの質問があり、私はそれに答えていきました。そのとき、あるプロテスタントの牧師から、次のような質問がありました。

「この建物の中をひとつお見寄りしてきましたが、入り口の所にイエス・キリストの名前があっただけで、キリスト教の象徴である十字架はどこにもありませんでした。それは、どうしてなのでしょう。」

私はこう答えました。「同じキリストの教えを奉じる者として、皆さんの考えに異論を差しはさむつもりはありませんが、私たちは、十字架はキリストの死の象徴であると考えています。しかし、私たちが世の人々に伝えたいと願っているのは、生けるキリストにほかなりません。」

すると彼は、「十字架を使わないというのでしたら、あなたがたの宗教の象徴はいったいどのようなものなのでしょう。」と問い返してきました。

私はそれに対して、「私たちの信仰の表現は教会員の生活そのものです。それ以外のものは何もありません。教会員の生活こそが、私たちの宗教の象徴です」と答えました。

この教会の正式な名称は、末日聖徒イエス・キリスト教会です。私たちはイエス・キリストを主、そして救い主として礼拝しています。そして聖書を聖典として受け入れ、メシヤの来臨を予言した旧約聖書の予言者たちの言葉は、

神の靈感によって与えられたものであると信じています。御父が肉において生みたもうた独り子の誕生、導きと教えの業、死、復活について書かれているマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの記録を誇りに思っています。古代のパウロと同じように、私たちは「福音を恥としない。それは……救を得させる神の力である」(ローマ1:16)ということ、そしてペテロと同じように、「[イエス・キリスト]による以外に救はない」(使徒4:12)ことを宣言しています。

私たちが、新世界で与えられた契約の書として受け入れているモルモン経には、昔西半球に住んでいた予言者の教えが書かれています。モルモン経は、ユダヤのバツレヘムで生まれ、カルバリの丘で亡くなられたお方について証する書物です。モルモン経は信仰が揺らいでいるこの世界に対し、主の神性を強く宣言するもうひとつの証です。モルモン経の「とびらの言」は、約1,500年前にアメリカ大陸に住んでいた予言者が書いたものです。そこには、モルモン経が書かれた目的について、「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させることである」と書かれています。

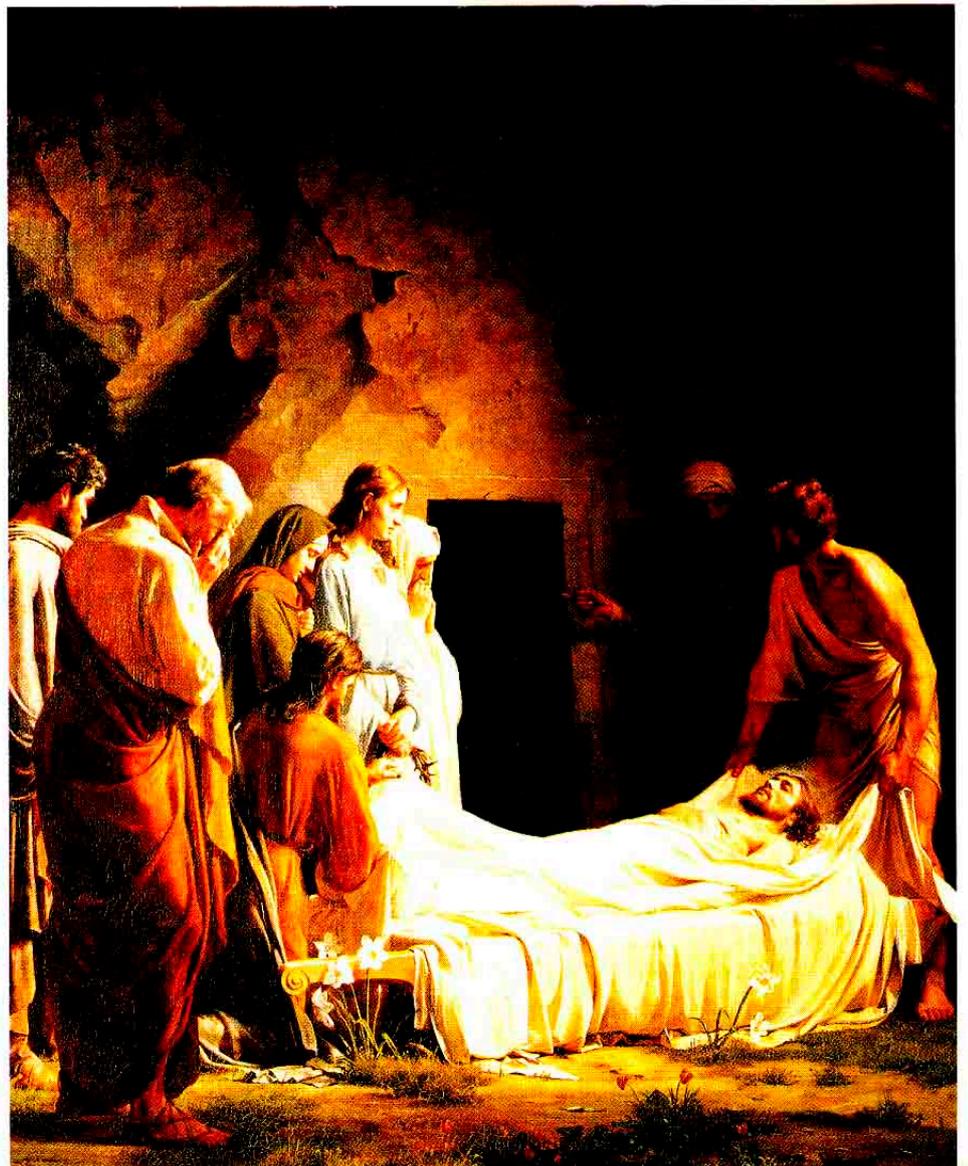
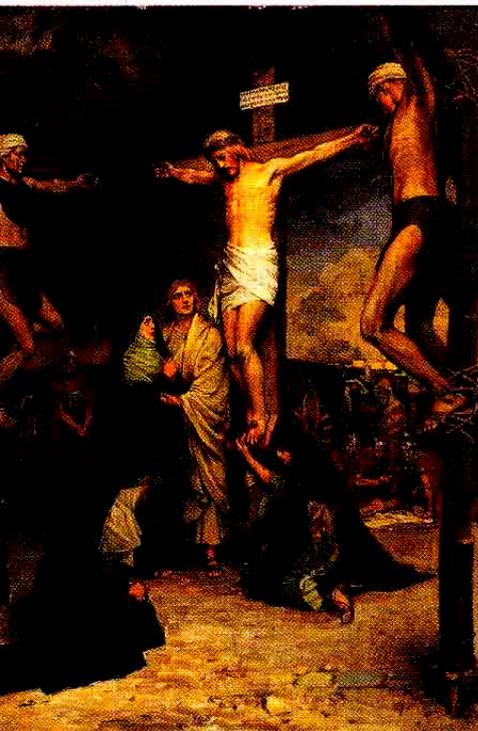
主は現代の啓示の書、教義と聖約の中で、ご自身について次のように宣言しておられます。「われはアルパにしてオメガなり。主なるキリストなり。すなわちわれは始めにして終りなり。世の贖い主なり。」(教義と聖約19:1)

これらの宣言や証を聞いてあの聖職者と同じように、「イエス・キリストを信じているのなら、なぜキリストの死の象徴であるカルバリの十字架を用いないのですか」と疑問に思う人もいるでしょう。

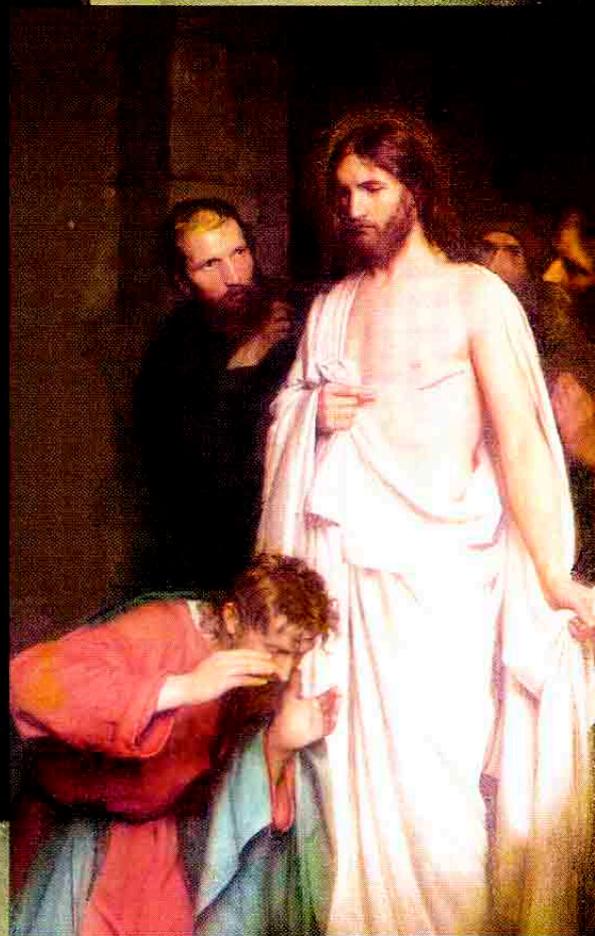
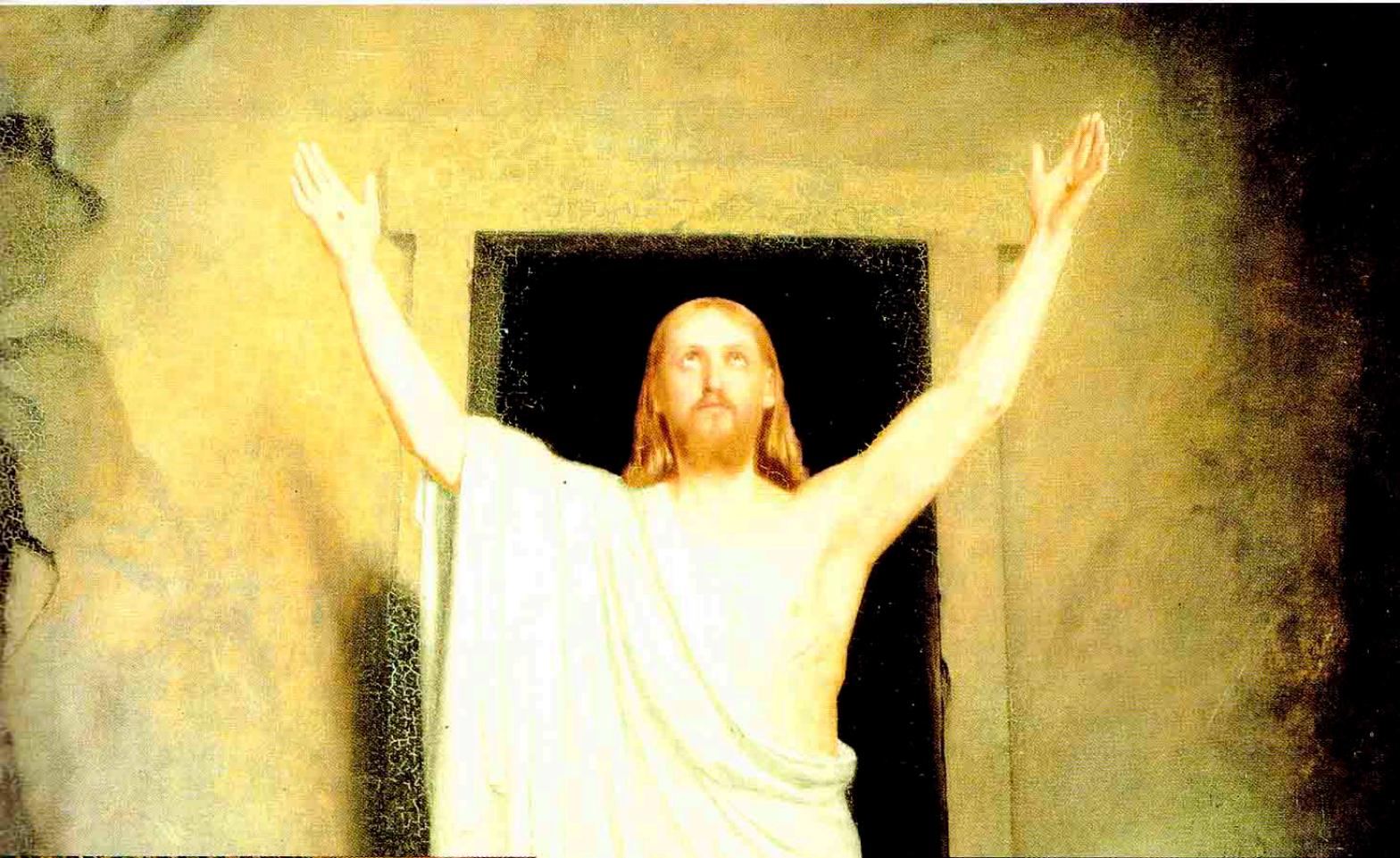
まず最初に、確かにこの教会の会員といえども贖い主のゲツセマネの苦しみを忘れてはならないということを申しあげておきたいと思います。救い主は全人類のためにご自身の命を捨てられましたが、それは非常に大きな苦しみを

伴うものでした。主が裁判のときに受けたひどいあざけり、その肉を引き裂いた残酷ないばらの冠、ピラトの前における暴徒たちの血に飢えた叫び、ひとり重い十字架を負い、よるめき進んだカルバリへの道、大くぎに手足を貫かれたときの激痛、あの悲しみの日の十字架上での苦しみ、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23:34)という神の御子の叫び、私たちは決してこれらのことを忘れてはなりません。

これがキリストの十字架が示している事柄です。十字架はキリスト、すなわち平和の君を苦しめ、滅ぼすために用いられた恐ろしい刑具であり、奇跡をもって病人を癒し、盲人の目を開き、死人をよみがえらせた救い主に与えられた悪意に満ちた報酬でした。そしてキリストは寂しいゴルゴタの丘に立てられたこの十字架の上で息を引き取られた



「キリストの埋葬」カール・ヘンリッック・ブロック画。デンマーク、フレデリックスボル城付属チャペル蔵。フレデリックスボル博物館の許可を得て掲載



のです。

私たちはこれらのことを忘れることができません。また、決して忘れてはならないことです。救い主、また贖い主、神の御子たるお方が、全人類のための身代わりの犠牲としてご自身を捧げられたのは、ほかならぬこの十字架の上だったからです。ユダヤ教の安息日を前にしたその日の夕べに、イエスの遺骸は十字架から降ろされ、あわただしく借り物の墓の中に横たえられました。そして、その夜の深いやみは、イエスに最も献身的に、また親しく仕えた弟子たちの望みをさえ奪ったのです。救い主が以前に語られた言葉を理解していなかった弟子たちは、ただ嘆き悲しむばかりでした。メシヤと信じ、すべての望みと信仰を託していた主が亡くなってしまったのです。永遠の生命について語り、ラザロを墓からよみがえらせたあのお方が、すべての人の例に漏れず、亡くなってしまわれたのです。短く、悲しみに満ちたイエスの生涯はかくして幕を閉じました。まさしくその昔イザヤが予言したとおりでした。イザヤは主について次のように書いています。「彼はわれわれのとのがために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え[た。]」（イザヤ53：5）主は彼らの前からそのみ姿を隠されてしまったのです。

イエスを愛していた人々が、今は土曜日と言われているその安息日の長い夜をどのような思いで過ごしたかは、ただ想像するしかできません。

やがて週の初めの日の夜明けがやって来ました。今、私たちはその日を主の安息日としています。悲しみに打ちひしがれてその墓に足を運んだ人々の前に天使が現われ、こう宣言しました。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。」（ルカ24：5-6）

それは人類の歴史の中で最も偉大な奇跡でした。イエスはかつて弟子たちに「わたしはよみがえりであり、命である」（ヨハネ11：25）と語られたことがありましたが、彼らにはそれが理解できませんでした。しかし、今初めて彼らはその意味を悟ったのです。悲しみと苦しみの中で従容と

して死につかれたイエスが、その3日後には力と美と命をまとい、死の眠りについた人々の初穂としてよみがえられたのです。イエスの復活は、「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである」（Iコリント15：22）という保証を、あらゆる時代の人々に与えるものでした。

カルバリで息を引き取られたイエスが、今や生けるキリストとして墓からよみがえられたのです。空になったその墓は、イエスの神性を証し、人々に永遠の生命への確信を与え、「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」（ヨブ14：14）というヨブの質問に対して答えを与えるものでした。

もしそのまま死の眠りの中にとどまっていたら、イエスの名は人々から忘れ去られ、よくても数ある偉大な教師の中のひとりとして、歴史書の数行に書き留められるにすぎなかったことでしょう。

しかし、死からよみがえったイエスは、今や命の主となられたのでした。そして弟子たちも、イザヤと共に固い確信をもって、「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる」（イザヤ9：6）と呼ばわることができるようになったのです。

かくして、望みに満ちあふれたヨブの言葉が成就されました。彼は次のように語っています。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮のうじがこの体を滅ぼしたのち、わたしは肉にあって神を見るであろう。しかもわたしのこの目で見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。」（欽定訳ヨブ19：25-27）

マリヤは復活した主を最初に目にしたとき、主を意味する「ラボニ」（ヨハネ20：16）と叫びましたが、それは確かに的を射た呼び方でした。なぜなら、主は命の君というだけにとどまらず、死をも克服されたお方だったからです。死のとげは消え去り、墓の勝利は過去のものとなったのです。

臆病だったペテロも今は以前とはうって変わって強い人格を身につけ、疑い深いトマスさえもが、確かな事実を前

私たちの信仰の表現は教会員の生活そのものです。
それ以外のものは何もありません。
教会員の生活こそが、私たちの宗教の象徴です。

にして、心の底から深い敬虔の念をもって「わが主よ、わが神よ」(ヨハネ20:28)と語るようになったのです。主はトマスに現われたあのすばらしい日に、「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20:27)という忘れることのできない言葉を語られました。

主はその後も多くの人々に姿を現わされました。パウロも主が「五百人以上の兄弟たちに」現われたことがある(Ⅰコリント15:6)と書いています。

そして、西半球にも主みずから語られたとおりに、他の羊がいました。あるとき、彼らは天から聞こえてくるようなひとつの声を耳にしました。その声は、人々に次のように語りかけました。「『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け』……また天を仰ぐと、天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白い衣を召して、降ってきて群衆の中に立ちたもうた。……時にそのお方は手を伸べて群衆に話しかけて仰せになった。『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。……起ちてわれに近づけ』と。」(Ⅲニーフアイ11:6, 8-10, 14)

モルモン経には、復活された主がその後、古代アメリカ大陸の民に導きと教えを施されたときのすばらしい様子が描かれています。

そして今、地上には現代の証人がいます。それは、全人類の主がこの神権時代、すなわち予言されていた時満ちたる神権時代の幕を開けるために、再び地上に来られたからです。復活された主とその父なる神が輝かしい示現のうちにひとりの少年予言者に現われ、古代の民に知られていた真理を回復するためのみ業を始められたのです。現代の予言者ジョセフ・スミスは、厳かに次のように宣言しています。「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。」(教義と聖約76:22-23)

救い主は今も生きておられます。私たちが、その死の象

徴を信仰のしるしとして用いないのはここに理由があります。では私たちは何を用いるべきなのでしょう。いかなるしるし、芸術、形も、生けるキリストの栄光とすばらしさを表現するには適切とは言えません。主ご自身は、何を象徴とすべきかについて、次のように言っています。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15)

兄弟姉妹の皆さん、生けるキリストへの信仰の象徴は私たちの生活以外にありません。これは簡潔ですが、深遠な意味を持っています。私たちの生き方は、生ける神の御子に対する証を確かに表わしたものでなければなりません。決してそのことを忘れないようにしていただきたいと思えます。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. 空の墓はイエス・キリストの神性と、永遠の生命の保証となった。イエスは復活することにより、命の君となり、死に対して勝利を収められた。
2. 復活に関しては、古代の証だけでなく、予言者ジョセフ・スミスが受けた示現や啓示、また主の实在を証する数多くの人々の厳かな証など、現代の証もある。
3. イエス・キリストは私たちの信仰の中心であり、私たちはキリストを、主また救い主として礼拝している。

話し合いを進めるために

1. 復活について自分の考えを述べる。家族にも各自の考えを話してもらおう。
2. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのに、よい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、前もって家長と話し合っておく必要はないだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



主の聖餐を理解する

十二使徒定員会会員

デビッド・B・ヘイト

私はこのところずっと救い主と贖罪^{しよくざい}について、また聖餐会の意義について考えています。教会で最も神聖な集会と言えば、まず聖餐会をあげることができます。ところが、聖餐会に出席していて、いくつかの事柄が気になっています。たとえば、準備のないまま聖餐会に出席している人が見受けられたり、心からの礼拝の妨げになるほど騒がしかったりすることです。

私は首をかしげたくなるのですが、私たち教会員は、いったいどのようにして主なる救い主とその犠牲、また私たちの負債を思い起こしているのでしょうか。聖餐会で黙想し、自分を振り返り、畏敬の念を持ち、悔い改め、人を赦す機会を持っているのでしょうか。

救い主が使徒たちに聖餐を与えられたあの印象的な出来事のことを考えると、私は感謝の念で胸がいっぱいになり、とても感動的な気持ちになります。それはまさしく歴史上の特別な一夜でした。過越の祭のその晩は、神の御子の無限の贖罪によって終わったのです。

この出来事は過越の食事から始まりました。イエスは「二階の広間」(ルカ22:12)にこの食事の用意をされました。過越の祭は動物の犠牲を捧げる公式の儀式でした。

重要なのは、神の御子がこの世での務めをバプテスマという儀式によって始められ、聖餐という儀式によって終えられたという事実です。どちらの儀式も、主の死と埋葬、復活を物語っています。

聖餐の開始

キリストが聖餐を始められたことに関する最も完全な記述といえば、弟子のニーファイが記録したものでしょう。

「そして、弟子たちがパンと葡萄液^{ぶどうぢき}とを持ってくと、イエスはパンをとってこれを裂き、また祝福して弟子たち

に与え、これを食えと仰せになった。

弟子たちがこのパンを食べて(みたまに)満されると、イエスはこれを群集にも与えよと言いたもうた。

そこで群集もこれを食べて(みたまに)満されると、イエスはその弟子たちに仰せになった『汝らの中一人選ばれて^{うち}按手礼により聖任さる。われはその一人にパンを裂き、これを祝してわが教会の会員、すなわち信じてわが名によりてバプテスマを受けたるすべての者たちにこれを与えしめんために相当の権能をかれに授けん。

今われはパンを裂きこれを祝して汝らに与えたるが、汝らも常にかくのごとくこの儀式を行わざるべからず。

これをわれが汝らに現わしたるわが体の記念に行え。さらば、汝らはこの儀式によりてたえずわれを記念すると言う証明を御父になすを得ん。もし汝らがたえずわれを記念せば、わが「みたま」必ず汝らと共に在らん』と。

イエスはこれを弟子たちに仰せになってから、弟子たちに杯^{さかずき}の葡萄液を飲めと言ひ、また群衆にも与えて飲ませよと言いたもうた。……

弟子たちがこの儀式を為し終ると、イエスはかれらに仰せになった『汝らは今為したるこのことのためにさいわいなり。かくするはわが命令を守ることにして、この儀式によりて汝らは、われが汝らに命じたることを喜びて行うと^し言うことを御父に証明するなり。

この儀式は、悔い改めてわが名によりてバプテスマを受けたる一切の者たちに汝らが常に授くるものにして、またわれが汝らのために流したるわが血の記念に行うべきものなり。而して、これによりて汝らは、汝らがたえずわれを記念すると言うことを御父に証明するなり。もしわれをたえず記念せば、わが「みたま」必ず汝らと共に在らん。

さてわれは、以上われが命じたることをなせと汝らに言う。汝らもし常に以上われが命じたることを守らばわが岩

この最後の神権時代に、 主は予言者ジョセフ・スミスによって その儀式を回復されました。

の上にその基を置くによりてさいわいなり。

汝らの中、これに過ぎたることまたこれに及ばざること
をなす者たちは、わが岩の上に基を置かず、かえりて砂の
上に基を置きたる故、雨降り、大水出で、風吹きてかれら
に当りなばかれらは必ず倒れん。而して地獄の門はかくの
ごとき者どもを今にも引き入れんとして開けり。」(IIIニ
ーファイ18：3-8, 10-13)

聖餐に関する教え

モルモン経の記述や新約聖書の証人たちの証から、聖餐
についていくつかの重要な真理がわかります。

1. イエスはご自身の肉と血を私たちの罪の贖いとして
捧げられました。私たちが再び生きられるようにご自分の
命を犠牲にされたのです。

2. 私たちは御子の体の記念にパンを食べます。それによ
って過越の祭や、最後の晩餐、ゲツセマネ、カルバリの
丘、そして復活を思い起こします。

3. 流された主の血はイスラエルとの新しい契約の象徴
です。私たちは主の苦しみの記念に水を飲みます。その苦
しみがいかに耐え難いものであったか、主はこのように述
べておられます。「その苦しmitるや、われ神、すなわちす
べてのうち最も大いなる者なりといえども痛苦のために身を
ふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つ
ながらを苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずし
てしりごみするも可ならんことを欲したり。

然はあれども、父なる神は讃むべきかな。さればわれは
この苦しみをなめ、人の子らの為に準備を為し終りたり。」
(教義と聖約19：18-19)

4. 従順に従い、常に主を覚えるなら、私たちは福音の
岩を土台としているのです。主の戒めに従って生活すると

きに、祝福を受けます。私たちはふさわしい状態でこれら
の象徴にあずからなければなりません。聖餐を取るための
ふさわしさを保つことが、聖霊を受けるための前提条件な
のです。モロナイは、「キリストの聖餐を受ける資格のない
中では慎んで聖餐を受けてはならない」(モルモン9：29)と
戒めています。

イエスはニーマイ人にこのように教えられました。「誰
にでもこれを飲みまた食う資格なしと汝らの認むる者あら
ば、その者にこれを飲みまた食うことを許すべからず……。

わが肉……を食ひ、またわが血……を飲む資格なき者が
これを食ひかつ飲むとせば、かくすることによりてその者
は身も霊も救われざることになるなり。よりて、ある人が
わが肉……を食ひ、わが血……を飲む資格なしと汝ら認む
るならば、その人の食うことも飲むことも禁ずべし。」(III
ニーマイ18：28-29)

資格があるとはどのような意味でしょうか。これには、
神殿推薦状を受けるための面接で尋ねられる質問事項がす
べて含まれます。しかし、キリストの弟子たる者には、単
に罪を犯さないということだけでなく、それ以上のことが
求められています。また、キリストの弟子たる者の間には、
とりわけ家族との間には一致がなければなりません。

資格の中には、ほかの人を赦すことも含まれます。恨み
を抱かず、敵意や憎しみを心の中から消し去ることで
キリストの福音に従って生活するという事は、すべての
人に対してキリストの純粋な愛を持つということです。も
し憎しみの気持ちがあるなら、聖餐を受ける前に和解する
ように努めなければなりません。

5. イエスは、御父のみ国で新たに私たちと共に飲むま
では、再びこれらの象徴を口にはしないと約束されました。
(マタイ26：29参照) 幸い、私たちに末日の啓示が与え
られていて、その中で主は、栄光に満ちたご自身の再臨に



先立つ大いなる聖会において、ぶどうの実から造ったものを飲まれる、ということをお知らせしておられます。そのとき、主はモロナイ、エライヤス、バプテスマのヨハネ、エライジャ、エジプトに売られたヨセフ、ヤコブ、イサク、アブラハム、ミカエル（アダム）、そしてペテロ、ヤコブ、ヨハネと聖餐を共にされます。さらにイエスは、「わが父がこの世の中よりわれに与えたまいしすべての人々と共に飲む」（教義と聖約27：14）ともつけ加えておられます。ここで言われているすべての人々とは、あらゆる神権時代のすべての正しい聖徒たちを意味しています。（教義と聖約27：5-14参照）

末日の聖餐式

この最後の神権時代に、主は予言者ジョセフ・スミスによってその儀式を回復されました。教会が回復された1830年4月6日に、主は次のように言われました。「会員はしばしば^{かいごう}会合してパンと葡萄液^{あずか}とに与り、主イエスを記念する必要なり。」（教義と聖約20：75）

次いで、祭司が聖餐を執行するときに捧げる祈りについての指示が与えられました。

その聖なる儀式が行なわれた日に、予言者は次のように記しています。

「私たちはパンを取って祝福し、それを裂いて彼らと共に食べた。同様に葡萄液も祝福し、彼らと共に飲んだ。それからその場にいた教会員一人一人に按手を施して、聖霊の賜を受け、教会員に確認した。」（「教会歴史」1：78）
教会歴史の初期に聖餐がどの程度頻繁に執行されていた

私たちは御子の体の記念にパンを食べます。それによって過越の祭や、最後の晩餐、ゲツセマネ、カルバリの丘、そして復活を思い起こします。

かはわかりませんし、大会のときに聖餐が行なわれていたかどうか不明です。しかし、教会が組織されて1年4カ月目には、主は安息日ごとに聖餐式を執行するように命じておられます。「されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。」(教義と聖約59：12)

教会が回復されてから150年の間に、主やその僕たちは聖餐に関していくつかの靈感あふれる指示を与え、儀式の神聖さと意義を強調してきました。

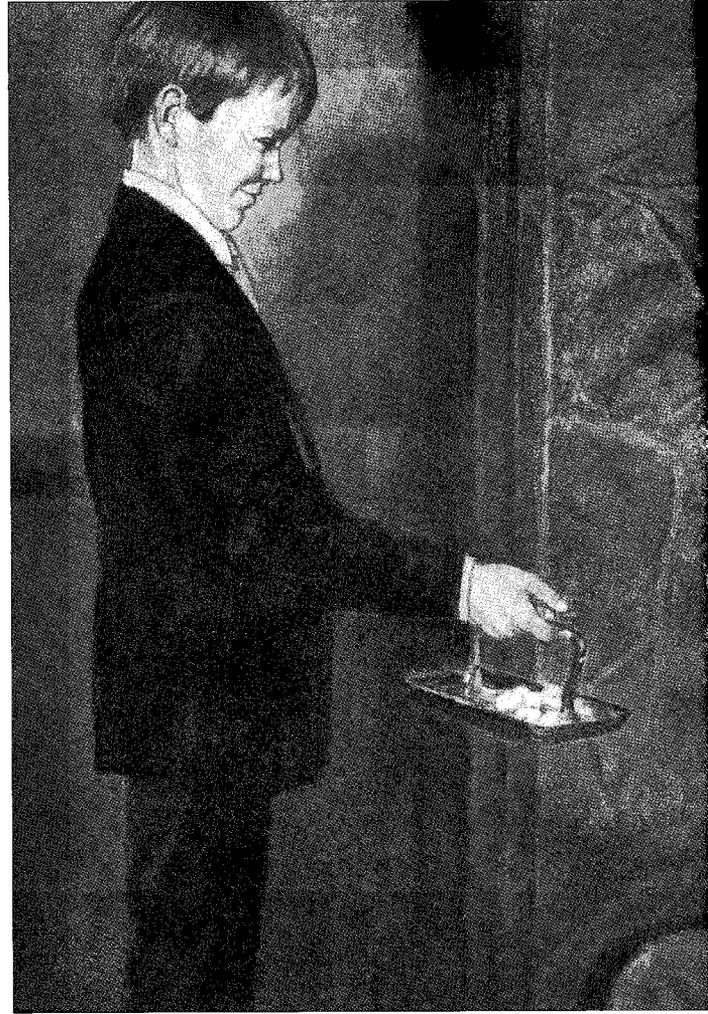
水の使用 最も重要な変更は、1830年8月の啓示によって加えられました。主はジョセフ・スミスに次のような啓示を下されました。「汝ら聖餐に与る時、もし汝ら誠心よりわが栄光のためにこれをなさば、すなわち汝らのために葬られたるわが体と汝らの罪の赦しのために流されたるわが血とを父の御前に記念してこれをなさば、汝ら何を食し何を飲むともあえて差支えなし。

それがため、われ今汝らに一つの誠命を与う。すなわち、汝らの敵より葡萄酒もまた強き酒をも買うことなかれ。

それがために、誠に汝ら地上に打ち建てらるべきこのわが父の王国に於て、汝らの中に新しく造りたるもののほかは何ものをも飲むことなかれ。」(教義と聖約27：2-4)

聖餐式の中止 大管長会は聖餐式をきわめて神聖な儀式と考え、1856年から1857年までの「改革期」には、数カ月間聖徒たちの間で聖餐式は執り行なわれませんでした。これは、彼らに「悔い改めと償いの期間を与え、準備ができた時点で、誓約を新たに」するためでした。(「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史ジャーナル」1857年1月26日付、p.2)

子供たちの参加 1877年7月11日に、大管長会は神権の



秩序を確立するために、教会歴史のうえでもきわめて重要な文書を発表しました。ブリガム・ヤング大管長が亡くなる1カ月ほど前に出されたこの歴史的な手紙の中で、大管長会は「聖餐の儀式の価値と重要性を学べるように」、子供たちにも日曜学校の中で聖餐を与える必要がある、と述べています。大管長会是这样言及しています。「もしこれが私たちの社会のどこにあっても習慣として確立されれば、次の世代を担う人々の間で主の聖日がますます正しく守られるようになるであろう。」(ジェームズ・R・クラーク「末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会メッセージ」全6巻、2：289) こうして聖餐式は日曜学校開会行事の一部となりました。現在では、毎週開かれる聖餐会において、引き続き子供たちに聖餐が配られています。これによって多くの子供たちが祝福を受けています。

聖餐式での説教がなくなる 教会歴史の初期のころ、聖



餐式の間、地元の教会指導者が説教をする習慣がありました。この慣行は、ブリガム・ヤング大管長の死後、いつのころからか廃止されました。

聖餐式から音楽が消える 19世紀には、聖餐式の間、音楽を流すのが習慣になっていました。ごく最近の1946年5月2日になって、大管長会は次のような声明を出しました。「理想的な状態は、聖餐が配られている間、完全な静寂を保つことである。この神聖な儀式が執行されている間、独唱、二重唱、合唱、楽器の演奏などを行なうのは好ましくない。」（「インブループメント・エラ」1946年6月号，p.384）

形式主義的なやり方を避ける ヒーパー・J・グラント大管長の時代から、大管長会は「教会指導総合手引き」を通じてあらかじめ警告を与え、あらゆる手順の形式化、画一化を避けるように強調してきました。これらの指示は、

聖餐を配る若いアロン神権者の服装にも当てはまります。彼らはさっぱりとした清潔な身なりをする必要はありますが、皆が同じ衣服を着用するようには求められていません。また、そのほかの行為についても同じことが言えます。たとえば若いアロン神権者は歩くときは一方の腕を後ろにまわすとか、立っているときは腕を組むとか、聖餐の祝福をするとき片方の腕を直角にあげるといった事柄も同様です。

以上の指示はすべて、聖餐会に出席して、瞑想し、敬虔な雰囲気を保ち、礼拝の精神をもって神聖な象徴であるパンと水を取るにより、聖徒たちが霊的な力を新たにできるように与えられたものです。

みたまの導くままに

以上のほかにも、集会そのものに関して靈感を受けた指示が与えられています。ジョセフ・フィールディング・スミス大管長の時代に、1970年12月17日付で、聖餐会を1時間30分とするようにとの指示が出されました。聖餐会の時間はそれ以後短縮されてきましたが、聖餐会の望ましい霊的水準について述べた以下の勧告には心を留めておく必要があります。

「もちろん、単に、時間的に定められた長さの集会を開くことが目的ではありません。むしろ、集会をよく計画し、この困難な時代に教会員が必要としている霊の高揚と教義的に正しい教えを提供することに目的があります。この点に留意して、信仰を鼓舞する経験を分かち合い、証を述べ、教義上の問題を説き、愛と兄弟愛の精神をもって語るように、話者に勧めてください。同時に、単なる旅行談や、討議、批判、救いに導く福音の原則とは直接関係のない、議論を誘うような話題は控えるようにも注意してください。また、聖餐会を計画するに当たっては、ワード部や支部の聖歌隊、音楽の才能のある人々を十分に活用して、変化と

私たちは地元の教会指導者に対して、 聖霊の導きと管理のもとに 集会を開くように奨励しています。

おもむき
趣を添えることも必要です。」

基本的な原則は、たびたび強調する必要があるように思われます。信仰の目的や土台を決して見失わないようにするためです。教会歴史の初期に、教会の集会について、主は次のような重要な原則を示されました。「されど書き誌するところのものにかかわらず、わが教会の長老たちは始めより、またこれより先も、聖き『みたま』の導き示したもうまみにすべての集会を指導することを常に許されたり。」(教義と聖約46：2)

私たちは地元の教会指導者に対して、聖霊の導きと管理のもとに集会を開くように奨励しています。ステーク部長会や監督会は、聖餐会の精神について絶えず強調しなければなりません。教会員に、敬虔な雰囲気を保つ必要があることを思い起こさせなければなりません。求道者を招いた集会が敬虔さを欠いていれば、教会員や宣教師は決まり悪い思いをすることでしょう。

聖餐会の計画を立てることは、監督に課せられた最も重要な責任のひとつです。監督会全体で、祈りをもって毎週の集会を計画すべきです。次のように考えてみるとよいでしょう。「人々はどんなメッセージを必要としているだろうか。若い人たちが抱えている問題や関心を寄せている事柄を取りあげる必要がないだろうか。そうしたテーマに一番ふさわしい話者はだれだろうか。だれに祈りをお願いしたらよいだろうか。」

教会員は、主が望んでおられるふさわしさの標準を知る必要があります。資格の中には、赦しと愛も含まれているのです。

信仰を強める

監督会が聖餐会を計画する際には、主として次のような目的を心に留めておく必要があります。すなわち聖徒たち

が啓発され、信仰を強められるようにすること、祈りをもって周到な計画を立て、聖餐会でみたまを感じられるようにすることです。

数年前にも、私は総大会でこのテーマについてお話ししました。(『聖餐』『聖徒の道』1983年7月号、pp.20-24参照) 私の若いころは、監督会や年上の祭司から聖餐の神聖さを教え込まれたものですが、今の若い人々からそうした感情が薄れていないかと懸念しています。

私たちは、「キリストに^よくすべての人々を勧誘」する(教義と聖約20：59) 仕事に着手しました。人それぞれに境遇は異なっている、ひとつの聖餐会に共に集うときには、みたまと愛、赦しの精神を感じられるようにすべきです。だれにとっても、聖餐会は敬虔な気持ちで瞑想し、感謝を表わす時間にすべきなのです。

モロナイは次のように述べています。すなわち、集会は「教会の責任で『みたま』の導きに従い、また聖霊の力によって行われた。それであるから集会の時かれらは聖霊の力が導くままにあるいは道を説き、あるいはすすめ、あるいは祈りあるいは乞いねがひ、あるいは讚美の歌を唱った。」(モロナイ6：9)

私たちはこの聖句にあるような精神を持って礼拝し、聖餐会を開くことができます。また、そのような集会を開かなければなりません。

ある霊的な集会が終わった後で、ひとりの姉妹が私にこう言いました。「聖餐会で話されたことを全部覚えているわけではありませんが、閉会の賛美歌を歌い、頭を下げお祈りをしたときの気持ちだけは記憶しています。」

私たちすべての者の上に神のみ恵みがありますように。そして、救い主と贖いの犠牲を覚え、皆がひとつになって聖餐会を敬虔な、主を記念する、礼拝の時間とすることができますように。□

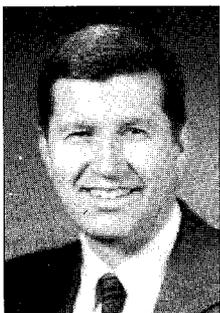
質・疑・応・答

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。

断食には食物を断つこと以上に深い意味があると聞いていますが、どんな意味があるのでしょうか。

J・ロジャー・フルーマン

(ワシントン州スポゲーン伝道部長)



あなたが聞いておられるとおり、確かに断食には食物を断つこと以上に大切な意味があります。断食の目的には、以下のようなものがあります。

1. 主についてもっとよく知り、主を礼拝する。
2. 霊性を高め主イエス・キリストへの信仰を深める。
3. 福音に対する証を得、証を強める。
4. みたまの声を聞き取り、靈感を受ける。
5. 救いの計画をよく理解し、主に依り頼まなくては救われないことを悟る。
6. 病人や特別な祝福が必要な人々のために祈る。
7. 断食献金を通して貧しい人々を助ける。

断食をする理由はこのほかにもいくつかありますが、私にとって特に大切な点をあげてみました。

真の断食の律法については、イザヤ書58章3節から12節にかけて記されています。ここには断食をする理由がたくさん述べられています。たとえば、「悪のなわをほどこき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ……飢えた者に、あなたのパンを分け与え」るため(6-7節)と出ています。また断食をすることによって得られる祝福については、このように述べられています。「また、あなたが呼ぶとき、主は答えられ、あなたが叫ぶとき、『わたしは

ここにおる』と言われる。」(9節) これらの聖句に私は強く心を打たれました。どのように断食したらよいか、またどんな祝福が得られるかを学ぶことができたのです。

断食と祈りは切り離して考えることはできません。聖典の中にはいつもこのふたつの言葉が並んで出てきます。アルマは人々に、自分の語った言葉が真実であることをどのようにして知ったかを語っています。「私は自分がこれを知るために長い間断食をして祈った。」(アルマ5:46) 断食には常に祈りが伴わなければならないのです。

また、偽善者のように、断食していることを人に見せようと「陰気な顔つき」で断食をしないよう気をつけなければなりません。(マタイ6:16-18; IIIニーフアイ13:16-18参照) しかし、病気のときや、医学的に見て望ましくない場合には、断食を控えるべきでしょう。

私は断食について完全に理解しているわけではありません。また断食をするとどんなことが起きるのか、なぜそうなるのかうまく言葉で説明することもできません。しかし断食をすると、神聖でとても力強い気持ちになり、心が啓発され、確信が持てるようになります。私の場合は、断食をすると、物事を鋭く感じるができるようになります。

私の息子スペンサーは、2年前にバプテスマを受けて以来、努めて断食をするよう心がけています。私たちが、幼いうちから無理に断食しなければならないと教えたわけではありません。また息子には私たちがするような長時間の断食はできないかもしれません。しかし先日、息子が断食証会で、私にこうささやいたのです。「ほくも証するよ。」私はほほえみながらうなずきました。そして、息子の真心の込めた証に心を打たれました。息子は断食によって、何か特別な力が心に働きかけるのを、確かに感じとっていたのです。

私たちも正しい目的をもって祈りの気持ちで断食をすれば、心の中に特別な気持ちを感じるができるようになります。□

聖餐を執行する人が、儀式の執行者としてふさわしくないとと思われるような場合どうすればよいのでしょうか。またそのような場合、聖餐の効力に何らかの影響があるのでしょうか。



レックス・W・オールレッド
(前メルケゼテク神権中央委員会書記)

聖餐の儀式は教会の最も神聖な儀式のひとつです。私たちはほとんど毎週、この聖餐にあずかる特権に浴しています。この聖餐を通して、私たちは主と交わしたバプテスマの誓約を新たにします。

アロン神権者や長老がふさわしくないまま聖餐を執行していることに気づいた人は、そのことをひそかに監督に伝え、すべてを監督の手にゆだねるべきです。ふさわしいかどうかを判断し、神権者に聖餐を執行する権能を託す責任は、監督だけにあります。

聖餐を取るのを拒んだり、当の神権者の資格をとやかく言っただけの人に不平をこぼしたり、本人を直接非難するようなことは、当事者にとっては何の解決にもならないどころか、よくない結果を招くだけです。このような問題は

非常に微妙な問題ですから、慎重に取り扱い、正しい判断を下さなければなりません。こういった処理も、すべて監督の責任です。

聖餐は教会における最も神聖な儀式のひとつですから、敬虔さと威厳をもって執行しなければなりません。未解決の重大な道德上の問題を抱えている神権者は、聖餐の準備や祝福、パスを行なうべきではありません。

聖餐を執行したり他の儀式に参加する際に、基本的にふさわしいかどうかは十分に検討されるべきですが、神権者がそういった様々な儀式や召しを行なうためには、必ずしも完全な人間である必要はありません。いろいろな点でまだ不完全であるにもかかわらず、主はそのような神権者たちにご自分のみ業を託しておられるのです。教会は、主のようになりたいと願う人々の学びの場であり、すでに目標に到達した人々の休息の場ではないのです。

神権の儀式は、定められた方法で権能を授けられた神権者により執り行なわれる限り、すべて効力を持つものです。地元の指導者は、できるだけふさわしい兄弟たちに聖餐を執行してもらえるように努めていますが、万一、儀式に加わっている人の中にふさわしくない人がいたとしても、儀式自体は無効とはなりません。儀式の神聖さは冒されるかもしれませんが、効力に関しては問題はありません。聖餐を受ける人が誠実でふさわしければ、聖餐がもたらし得るあらゆる祝福、恵みを受けることができます。

聖餐をふさわしい状態で執行し、またふさわしい状態で受けるならば、私たちは毎週実生活の中で祝福を受けることとなります。あらゆる年代の会員にとって、聖餐の儀式に参加し、イエス・キリストの回復された福音にあずかることは、なんとすばらしい特権でしょうか。□

ひな菊から学んだこと

どの花も明るく清らかで、見る者の心に慰めを与えてくれました。

アン・レムリン

古 都エルサレムを囲む城壁の外側からさほど遠くない場所に、周囲の騒音から隔絶された美しい園が、落ち着いたたたずまいで広がっています。その囲いの内側には神聖な雰囲気さえ漂っています。園に足を踏み入ると、人々の目は空になったひとつの墓に引きつけられます。人々がここを訪れるのは実はこの墓のためなのです。この空になった墓は、ひとつの偉大な計画がまっとうされたことを証しているのです。



エルサレムに住み勉学に励んでいたころ、私はたびたびこの園を訪れました。ある日、庭園内の静かな小道を歩いたあと、私は気に入ったベンチを見つけ腰をおろしました。大きな木々の木陰で、背後には花々が咲き乱れていました。そこで私はひとり孤独感に浸りました。そして鳥のさえずりを聞きながら、昔この場所で起こった出来事に思いをはせました。

聖典を開き、そこに記されている言葉に目を留めているうちに、周囲の世界が私の視界から次第に消えていきました。私にとって聖典に記されたそれらの言葉は、ほとんど読む必要はなくなっていました。というもすでに何カ月間もイスラエルで勉強を続けていた私の心に、それらの聖句はすっかり焼きついていたからです。「彼らは、イエスの死体を取りおろし、ユダヤ人の埋葬の習慣にしたがって、香料を入れて亜麻布で巻いた。イエスが十字架にかけられた所には、一つの園があり、そこにはまだだれも葬られたことのない新しい墓があった。……イエスをそこに納めた。」(ヨハネ19:40-42)

読み進めるにつれ心の中にその場面が広がってきました。やがて、そのイメージは真に迫ったものとなり、私の目の前で動き始めたのです。

日が暮れる前に急いで園に入ってきたヨセフとニコデモが、イエスを葬るために、ぐったりとなった主の体を墓へ運んでいきます。救い主の教えに従ってきた女たちが涙を流しながらあとに続き、男たちが香料を含ませたきれいな亜麻布で主の体を包んでいる間、離れた所から見守っています。そして男たちは、掘ったばかりの岩の墓の中にある石の台の上に遺体を安置しています。空は暗くなってきました。男たちは埋葬の準備を終えると、大きな岩を転がしてきて墓の入り口をふさぎました。……

思いめぐらすのをやめ、私は聖典から目をそらしました。しかし先ほどのイメージは目の前から去りません。……

時は流れ、今その墓は空になり、入り口をふさいでいた岩も取りはずされています。……

私の頭の中に広がっていたイメージは徐々に薄らいできました。腰をおろしていた石のベンチの堅さが伝わってきました。頭上の木々の間からはあいかわらず鳥のさえずりが聞こえています。最後のイメージが頭の中からすっかり

消えてしまうと、ふとすぐ前の茂みに目が留まりました。そこには一面にひな菊が咲き誇っていました。

私は一本一本の花に魅せられて、その茂みを見つめていました。澄んだ白い花びらが、柔らかそうな橙色の中心を取り巻いています。どの花も明るく清らかで、見る者の心に慰めを与えてくれました。私はその美しい花々に心を奪われ、それらが私に何か語りかけているように感じました。心の中にひとつの聖句が浮かんできました。

「見よ、すべての事物それによく似たるものあり。すべての事物は創られて……われに就きて証をなす。」(モーセ6:63)

私はすべての事物がイエス・キリストの神性に対する生きた証であることに気づきました。ひな菊の一本一本が、キリストが生きておられることを証してくれたのです。その橙色の目を上に向け、ひたすら主の栄光を仰いでいるのです。主がいとおしんで造られたそれらの被造物は、主の光と真理にいささかの疑念も抱いていません。なぜなら万物は主により創造され、主を証しているからです。もし主が、ご自分を賛美している一輪一輪のひな菊をご覧になったら、どんなに大きな愛と慰めを感じられることでしょうか。群衆に非難され、あざけられ、世のすべての人々が主に反抗して、主を否定し、憎しみさえ見せたときでも、主はみずから造られた素朴な被造物がたたえているご自分への揺るぎない証をご覧になって、どんなにか大きな慰めを得られたに違いありません。

イスラエルに住んでいる間、私は聖典の中の数々の偉大な出来事にしばしば思いをはせてきました。それらの出来事はどれも、美しい被造物に囲まれた場所、すなわち高い山々の頂や聖なる森、あるいは園などで起きているのです。

ひな菊を見て、私は平易でありながら奥の深い教訓を学びました。私は神の被造物のひとりとして、自分に与えられた使命のことをよく考えます。そしてこう自問してみるのは、キリストが、もし私の瞳の中をご覧になったら愛と慰めを感じてくださるだろうか。私はまごころからキリストの栄光を仰ぎ見ているだろうか。私の表情はキリストの愛を反映しているだろうか。私の行ないはキリストが生きておられることを強く確固として証しているだろうか、と。□

メシヤへの道

ブリガム・ヤング大学学長

ジェフリー・R・ホランド

救い主にとっても、この世の生涯は決して安楽なものではありませんでした。それはキリストのみ名を受ける人々にとっても同じではないでしょうか。



イエス・キリストに従おうとする人には、避けて通ることのできない責任がいくつかあります。サタンは、救い主に対してもそうでしたが、私たちに対しても、苦しい道よりも楽な道を選ぶようにとの誘惑を仕掛けてきます。「クリスチャンといっても、そう堅苦しく考えることはない」と。イエスはその誘惑と

戦いました。私たちも戦わなければなりません。イエスにとって、この世の生涯は決して安楽なものではありませんでした。それはキリストのみ名を受ける人々にとっても同じではないでしょうか。

人の目に最もはっきりと映る罪は、神に公然と反旗を翻すような行為ではないでしょうか。この世が創造される前に、明確な叛意をもって、神に敵したサタンがそのよい例です。カインの時代から、全地に争いがある今日に至るまで、サタンは、福音とその教えに対して暴力的で破壊的な敵対行動をとるよう、神の民を誘惑し続けてきました。このような行動は、極端な罪悪であり、だれの目にも明らかなものです。

しかし、サタンはもうひとつ別な方法を用います。それはよく注意しないと識別できない狡猾な手段です。それほど暴力的でなく、目立つものでもありません。ちょっと見ただけでは、そう邪悪とも思えません。しかし、そこが狡猾といわれるゆえんなのです。この方法は非常に陰険です。それは、楽な生き方を勧める物柔らかな感じの誘惑としてやって来ます。次の話を思い起こしてください。「さて、イエスは御霊によって荒野に導かれた。悪魔に試みられるた

めである。

そして、四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。

すると試みる者がきて言った、『もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんなさい。』

イエスは答えて言われた、『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言^{ことば}で生きるものである』と書いてある。』

それから悪魔は、イエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせて言った、『もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。「神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう」と書いてありますから。』

イエスは彼に言われた、『「主なるあなたの神を試みてはならない」とまた書いてある。』

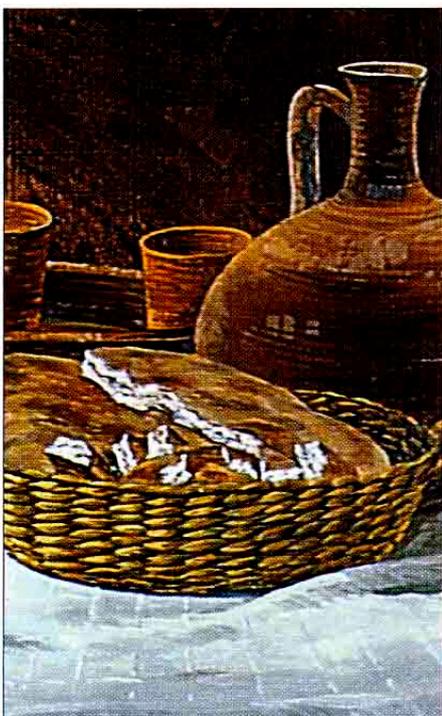
次に悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華とを見せて言った、『もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう。』

するとイエスは彼に言われた、『サタンよ、退け。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」と書いてある。』

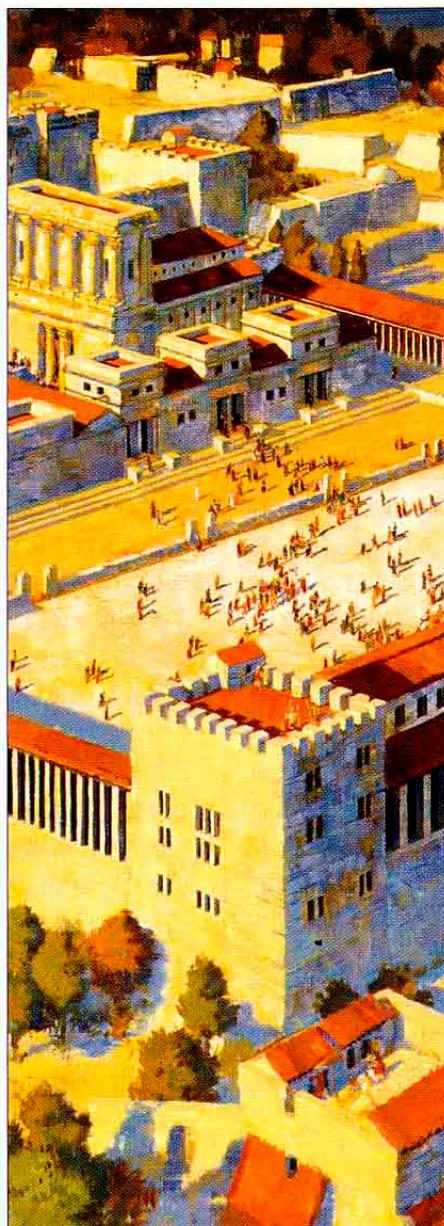
そこで、悪魔はイエスを連れ去り、そして、御使たちがみもとにきて仕えた。(マタイ4:1-11)

誘惑は日々刻々とやって来ます。末日聖徒といえどもそれを避けることはできません。キリストの場合と同じように、この種の誘惑は、私たちに対しても、非常に陰険で狡猾な形をとって迫ってきます。この誘惑について、簡単に

もしあなたが
神の子であるなら、
これらの石が
パンになるように
命じてごらんください。



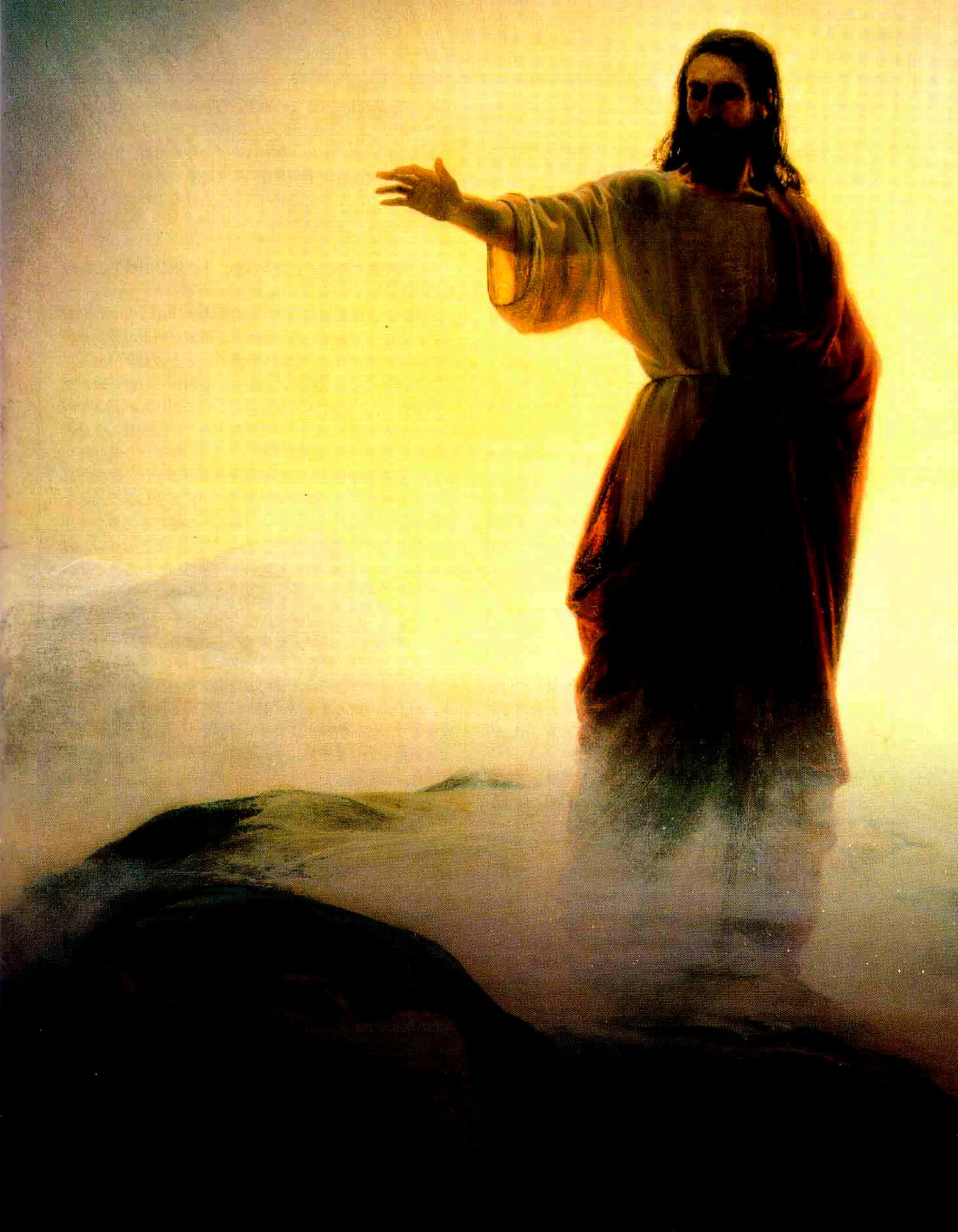
もしあなたが
神の子であるなら、
下へ飛びおりて
ごらんください。……神
はあなたのために御使
たちにお命じになると
……彼らはあなたを手
でささえるであろう。



もしあなたが、
ひれ伏してわたしを拝
むなら、これらのもの
を皆あなたに
あげましょう。

するとイエスは彼に言わ
れた、「サタンよ、退け。
『主なるあなたの神を
拝し、ただ神にのみ仕
えよ』と書いてある。」
(マタイ4：1-11)





私の考えを述べてみたいと思います。

「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」

どのような誘惑をするにせよ、サタンは必ず私たちの本能的な欲望に働きかけてきます。苦勞して複雑なことをするよりは、本能的な欲求を利用する方がはるかに手っ取り早いからです。イエスが味わった飢えは肉体的な実感を伴うものであり、非常に現実的なものでした。イエスも自分の肉体を支えるには食物が必要でした。イエスの断食は40日40夜に及びました。なぜイエスは食べようとしなかったのでしょうか。食べようと思えばすぐにでもできたはずです。なぜ石をパンに変えて食べなかったのでしょうか。

この誘惑は、単に食べるか食べないかという性質のものではありませんでした。言うまでもなく、イエスはこの断食に入る前は食物を口にしていましたし、断食が終われば、またすぐに食事をしたことでしょう。とにかく現世の生涯を終えるまでは食べていかなければならないのです。この誘惑で注意しなければならないのは、楽な方法で空腹を満たせと、サタンがささやいている点です。サタンは、持てる力を乱用し、しかるべきときを待たずに、正しからざる方法で空腹を満たせと誘惑しているのです。「肩ひじ張ったメシヤ」になるなどという誘惑です。では、なぜ楽な道を選んではならないのでしょうか。食物を口にするとという些細な妥協をして、満足感を味わうのは許されぬことなのではないでしょうか。肉体はそれこそ飢えるように食物を欲しているのです。しかしイエスは、勞せずして不当に得た食物で空腹を満たすようなお方ではありません。必要とあらば、いつまでも、断食を続けたことでしょう。

性のいとなみも、神から人間に与えられた神聖かつ重要な肉体的喜びのひとつです。それは人間の心に強く働きかける、自然なものです。また、私たちが神のような者とするために、神ご自身が与えてくれたものです。しかし、この喜びは無条件に与えられるものではありません。欲求を感じたらすぐに許されるという性質のものではありません。何の制約もなしに与えられるものでもありません。神聖な力を失わせてしまう放縱の中に、この喜びを見いだすことはできません。ふさわしいときに、定められた枠の中で得られるものです。私たち人間に善なるものを与える権利を持っているのは神であり、サタンではありません。キリストの真の弟子ならこの本能的な欲求を感じたときに、はっきりと「この力は、神のみこころに従って用いなければならない」と言うに違いありません。性の力は、ふさわしいときに、愛をもって、結婚という絆の中で用いるべきものです。正しく神聖な男女関係は、神の計画の中にあって非

常に重要な位置を占めています。日々の食物の問題の比ではありません。「融通無碍」のメシヤなどというものには存在するはずがありません。救いはみずからを治め、犠牲をいとわぬ人にもみ与えられるものです。若い人にも、また年輩の方々にも、どうか肉欲の誘惑に負けることがないようにと、訴えたいと思います。

「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんください」

サタンは、神殿がイスラエルの民の信仰生活の中心であることを知っていました。確かに、神殿は約束のメシヤが来るはずの所でした。当時も神殿には多くの人々が入り出して礼拝をしていました。しかし、先祖からの言い伝えや不信仰によって、イエスを贖い主として受け入れていない人がほとんどでした。イエスに対するこの誘惑はこう言い換えることができると思います。「さあ、神殿から飛び降りて、さっそうとしたところを見せてやりなさい。聖典に書いてあるとおり、天使が来て支えてくれるでしょう。そうすれば、人々はあなたに従い、あなたを信じるはずですよ。彼らはあなたを必要としています。あなたにとっても、彼らが必要でしょう。彼らを救いたいと思っているのですから。彼らは誓約の民です。恐れずにこの神殿から飛び降りて、身に何の害も受けないところを見せてやりなさい。これほど効果的な方法はありませんよ。さあ、本当に自分がメシヤだということ知らせてやりなさい。」

サタンのこの誘惑は、最初の誘惑よりもはるかに狡猾です。相手の内面の奥深くに働きかけているのです。パンの欲求よりも強い精神的欲求への誘惑です。はたして神はイエスを救うのでしょうか。イエスはどうなるのでしょうか。イエスは、まだ始めたばかりとはいえ、その神聖な使命に関して、神の導きと助けを受けることができたはずでした。また何か判断を下す場合は、最終的な確認を得てから行動に移るのが、しかるべき形だだと思います。なぜイエスは霊的な確認を得ようとしなかったのでしょうか。民の目を自分に引きつけようとしなかったのでしょうか。神の力をもってすれば、サタンの求めに答えることなど、いとまたやすく、すぐにでもできたはずですよ。

しかし、イエスはこの誘惑を退けました。イエスには、退けるべきこと、みずからを制することについて、すでに神の御子としての備えができていたのです。確かに、イエスは自分に従う人々を得、慰めを受けることもできました。とはいえ、サタンが言うような方法によってではありません。このときのイエスには、まだ自分の教えに聞き従う人もなく、慰めも受けていませんでした。イエスは十分にそれに値する方でした。しかし、まだみ業を始めたばかりの

神はそれを通して皆さんと語るのです。
また、皆さんがそれをよく受け入れるなら、
神はみ業を進めるために皆さんを用いられることでしよう。

段階でした。いつか報いが与えられるのは確実でしたが、神の御子といえども、その時が来るのを待たなければならなかったのです。

みたまの導きを受けるには、忍耐強く待たなければならぬということを忘れないでください。皆さんと私の生活は大分違うところもあるでしょうが、共通した部分もあると思います。私は自分が神の目にどのように映っているかを知るために、これまでいろいろと苦闘してきました。10代後半のころには、お祈りをするのも大変でした。断食とならなるとおさらでした。伝道生活も決して楽ではありませんでした。学生時代にも苦闘を重ねましたが、結局わかったのは、人生は苦闘の連続だということでした。大人になってからも、涙を流しながら、導きを求めてきました。価値ある事柄を一朝一夕に達成し得たことはないと思います。しかし、今となってはそのことに感謝することができます。

私たちは、神殿の頂上から飛び降りるというような劇的行為を通じて、神の子としての自分の価値を理解するようには求められていません。予言者などごく少数の例を除いて、私たちは皆派手な行為とはまったく無縁の方法で、こつこつと神のみ業を進めていかなければならないのです。神を知るために、また神が自分を心にかけられることを知るために努力し、時間を捧げ、苦しいながらも謙遜に地道な奉仕を続けていくなれば、「あなたの足が石に打ちつけられないように、〔御使いたちが〕あなたを手でささえるであろう」(マタイ4:6)という言葉が成就する日が必ず来ます。すぐには来ないかもしれませんが、それを待つ時間にも大切な意味があるのです。霊的な面での義務と苦闘を貴い大切なものと考えてください。神はそれを通して皆さんと語るのです。また、皆さんがそれをよく受け入れるなら、神はみ業を進めるために皆さんを用いられることでしよう。

ときには、いくら努力しても、ますます困難な状態になっていくこともあります。元気を出してください。傑出した人々は皆、その道を通ってきたのです。

さて、失敗を重ねてきたサタンはここで最後の策に出してきました。サタンは、肉体的な面でも霊的な面でも誘惑ができないとなると、非常に露骨な策を用いてきます。それは救い主に対しても、私たちに対しても同じです。世の諸々の王国とその栄華を見渡せる高い山の上に立って、サタン

はこう言いました。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう。」(マタイ4:9)

ここに至って、サタンはそれまでの狡猾なやり方に代え、圧倒的な華々しさをもってイエスに迫りました。サタンは、世の王国が自分のものではないという事実はまったく無視していました。そして、大いなるエホバ、すなわち天と地の神に対して、「あなたの価値はどれほどのものか」と問いただしたのです。「確かに、安上がりなパンの誘惑や、メシヤとして大芝居の誘惑も通じなかった。しかし、この世の富にあらがえる者はだれひとりいはいはしない。さあ、あなたの価値がどれほどのものかと言うがいい。」サタンのこのやり方は、彼の「不信仰箇条」第1条、「すなわちこの世に金で買えない物はない」というきわめてあからさまな教えに基づくものでした。

しかし、イエスが全世界を統治される日が、いつの日かやって来ます。そのとき、地上のあらゆる権力は、イエスの麾下に従います。そしてイエスは、王の王、主の主となるのです。しかし、サタンが言うようなやり方によってではありません。そこへ行き着くには、最も険しい道を歩まなければならないのです。神の御座への道は、苦しみと悲しみと犠牲の道でした。当時からさらに7世紀さかのぼる昔、イザヤはイエスについて次のように予言しました。「彼は侮られて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた。また顔をおおって忌みきらわれる者のように、彼は侮られた。われわれも彼を尊ばなかった。……」

しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。……

彼はしえたげられ、苦しめられたけれども、口を開かなかった。ほふり場にひかれて行く小羊のように、……口を開かなかった。」(イザヤ53:3, 5, 7)

「神の王国の中で自分自身をしっかりと保っていくのは、それほどむずかしいことなのだろうか。もっと楽な道があるはずだ。お金でその楽な道を選ぶことはできないだろうか。私たちはときどきこのような疑問を持つことがあります。しかし、それはできないことです。皆が皆、そのようなお金を持っているわけではありません。また、お金では買えないものもあるのです。お金、名声、この世的な栄華は、用心しないと、私たちを永遠の苦しみに陥れてしまうこともあります。

教会全体としても、また一個の教会員としても、私たちは衣食を賄い、王国のみ業を進めるための経済力が必要です。しかし、それを得るために、自分の心^{ココロ}を売る必要はありません。今の世の中には、「一生に一度のチャンスだ」などと、無分別なもうけ話を持ちかけてくる人がいます。その多くは、勞せずして一獲千金をもくろむ、「濡れ手で粟」式のうまい話です。不運にも、そのような口車^{クチクルマ}にのり、欺かれてしまう人もいます。確かに、私たちは地の富の祝福にあずかることができますが、このような方法によってではありません。

大切なのは、適切な方法で得た生活に必要な収入、学校での勉強、正直な働きです。ひたむきに努力し、働くこと、また良い目標を立て、その実現に向けて頑張ること、これらはすべて労力を費やし、時間をかけるに値するものです。やがてその努力が実を結ぶときが来ま

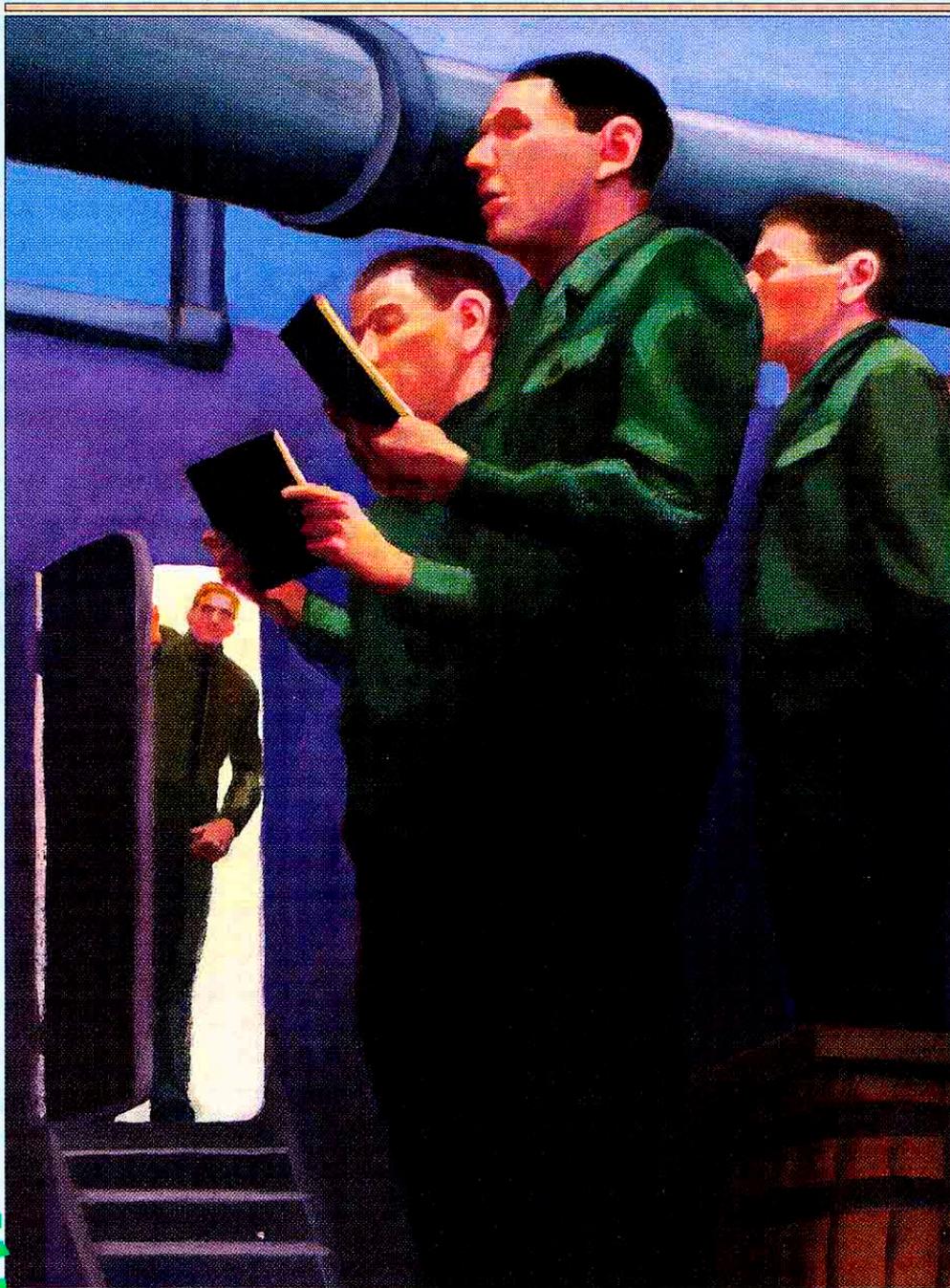
す。思ったより早く来る場合もあります。しかし、それは決してたやすいことではなく、楽をして達成できることでもありません。

肉体的な欲求を抑制し、心の慰めも、十分な物もない状態で生きていくのはたやすいことではありません。しかし、ときとして私たちはそうしなければならないことがあります。私たちがクリスチャンとして交わした誓約の中に、安楽な道を保証するような条項はないのです。求められているのはひたむきな努力と、正しい行ないです。努力をしても、いくら長い時間をかけても、実現不可能と思える事柄もあるでしょう。

しかし、頑張り続けるなら、み使いが来て、私たちに仕える日がやって来る可能性もあるのです。(マタイ4:11参照)皆さんが、ぜひその祝福にあずかることができるよう、イエス・キリストのみ名によってお祈りします。

アーメン。□





心を 変えた 牧師

ラルフ・モーテンセン

戦 時中のことでした。私たちは家族や恋人に別れを告げると、カリフォルニア州のサンフランシスコ港に停泊していた商船「シー・レイ」号のタラップを上りました。目的地までは45日間かかる予定でした。

満員の乗客2,500人の中で、少なくとも私を含めて3人が末日聖徒であり、私たちは何よりも自分たちの聖餐会を開きたいと思っていました。

そこでその船の専属牧師に、自分たちの集会のために船内の礼拝堂を使用してよいかどうか尋ねました。すると驚いたことに、牧師は、そんなわずかな人のために特別な集会を開く時間はないので、ほかの宗派の集会に出席するように、と言うのです。

満員の乗客2,500人の中で、少なくとも私を含めて3人が末日聖徒であり、私たちは何よりも自分たちの聖餐会を開きたいと思っていました。

私たちは、自分たち自身で集会を開きたいこと、礼拝堂は空いてるときに貸してくれればよいことを説明しましたが、牧師は、たった3人で礼拝堂を使用するのは有意義ではないと、頑として聞き入れてくれません。それでも、私たち3人にとっては有意義なことですからと言って、私たちもあきらめませんでした。

何度お願いしても、牧師は首を横に振るだけで、とうとう荒々しい調子で、ほかに予定されている礼拝のいずれかに出席しなさいと言い残して、行ってしまいました。

仕方なく私たちは満員の船上で、人目につかない場所を探し始めました。しかし甲板の上はどこも兵士でいっぱいでした。狭苦しく息の詰まるような船室にいるよりも、海を渡るさわやかな風にあたっていたいとだれしも思うものです。私たちが船の中を端から端まで探しまわった末に得た結論は、煙突の近くの窮屈な場所にあぐらをかいて一緒に聖典を勉強するしかほかに方法がないということでした。自分たちだけで自由に聖餐を受け、賛美歌を歌い、祈ることのできるプライベートと自由は味わえませんが、何はともあれ一緒に集まることはできそうでした。

このような計画について話し合っていると、拡声器から、「6時から45番の部屋で末日聖徒のために礼拝を行ないます」という声が鳴り響きました。私たちはびっくりしましたが、それでも集まる場所が与えられたことを喜びました。それに、どうして牧師の気持ちが変わったのか不思議でなりませんでした。

間もなく6時になるので、私たちは急いで階段へ向かい、元は食糧貯蔵庫だった船室に降りていきました。広々とした船室は、分厚くて長い輸送用の板と小さな木の樽が散乱し、家具らしいものは何ひとつありませんでしたが、とにかく聖餐を受け、賛美歌を歌い、祈ることのできる場所を与えられた私たちは心がはず

む思いでした。

さっそく、私たちは厚い板と樽を利用してベンチ作りにとりかかりました。ほどなくして戦闘服を着た若者たちが階段を降りてきて、「末日聖徒の集会場所はここですか」と尋ねました。若者たちの協力でまたたく間に船室はきちんと整い、礼拝の準備ができました。人数を数えてみると、なんと30人ものが集まり、私たち専用の船室で最初の集会が開かれたのです。

私たちは「福音の原則」の軍人版に載っている歌と聖餐の祈りを用いて、特別な聖餐会の準備をすっかり整えました。用意もなしに語られた説教や教えに耳を傾けながら、私たちは主のみたまが注がれるのを感じました。皆ひとつになって天父とその御子を愛する気持ちを味わい、胸がいっぱいになったのです。また、家族や家の思い出が鮮やかによみがえり、ほのほのとした気持ちになりました。

集会が終わったあとも、共に過ごすこの貴重なひとときの名残を惜しんで、私たちはその場を立ち去り難い思いでした。航海中に、これほど家庭的な雰囲気味わう機会にはほかにありませんでした。1週間ずっと私たちは次の礼拝を楽しみにしていました。この集まりは私たちの心の灯となり、おかげで、何か気落ちするようなことがあっても、それを乗り越えることができました。

毎週日曜日に礼拝を行なっていると、いつの間にかあの牧師が私たちの集会に興味を持ち始めていました。1945年1月の断食日曜日の集会で、私たちは牧師が階段を降りて船室にやって来るのを見てびっくりしました。そして礼拝に出席してもよいかと聞いてきたので、もちろん私たちは歓迎しました。

戦闘服姿の人たちが頭を下げ、敬虔な祈りを捧げ、賛美歌を歌い、聖餐を祝福し、心からへりくだってパンと水を受けました。そして聖餐式が終わると、ひとりずつ立って、両親から教えを受け、愛

と喜びに満ちた幸福な家庭で育ったこと、またイエス・キリストの福音が地上に回復され、生ける予言者がいることへの感謝にあふれる証を述べました。

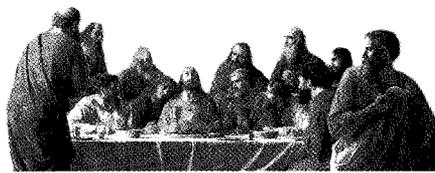
集会後、牧師が近づいてきて、次の礼拝のときに話をしてもよいかどうか尋ねたとき、私たちはためらわずにその申し出を受け入れました。

さてその日曜日が来ました。聖餐式を執り行なったあと、私たちは牧師に話す時間をあげました。樽に厚い板を渡しただけのベンチに腰かける私たちを前にして、牧師は次のように語りました。「私は皆さんのお名前も、また皆さんがここで何をしておられるのかも存じませんが、皆さんがだれであれ、また皆さんの使命が何であれ、これからどうぞ続けていただきたいと思います。私は今まで牧師になるために何年も勉強し、何度も礼拝を執り行ない、教会の様々な会議に出席したことがあります。けれども、先週の日曜日に皆さんの集会に出席したときほど、霊性に満ちた経験をしたことは、かつてありませんでした。どうぞこれからも、皆さんがここで示されたような模範をほかの人たちへ示し続けてください。」

牧師が、末日聖徒に対する見方をこんなにも大きくと変えたことに、私たちはとても感動しました。

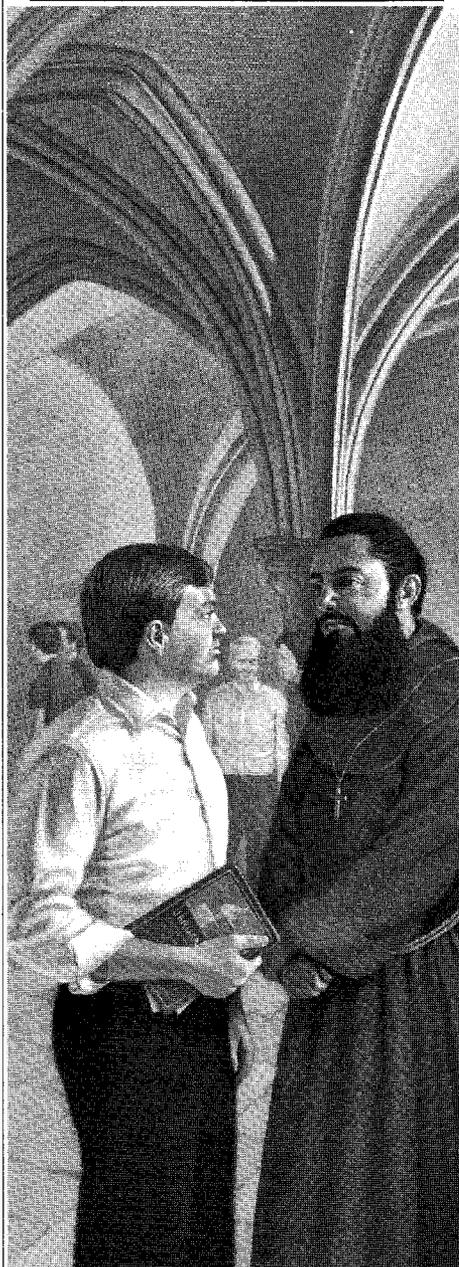
その後も私たちは、毎週日曜日にその神聖な部屋で集会を開き、船が目的地に着くと、それぞれの任務に散っていきました。そのとき以来、私はあの牧師がその後どうしているだろうか、今はどこに住んでいるだろうかと考えることがよくあります。私たち末日聖徒に集会場所を提供してくれたあの牧師に感謝しています。また、甲板の下の船室で開いたあの特別な集会にも感謝しています。□

*ラルフ・モーテンセン：アラモーサ・コロラドステーキ部アラモーサ第1ワード部所属、学校理事。



二階の 広間で

マービン・K・ガードナー



私たちは期待に胸はずませながら、二階の広間につながる階段を上りました。そこは、キリストが最後の晩餐を行なわれたと言い伝えられている場所です。私たちアメリカ人学生と教授の一行は、エルサレムでの短い滞在期間に、過去の戦争がもたらした爪跡の数々を見てきました。しかし、たびたび流血に見舞われたこの「聖都」にも、平和と希望のきざしがいくらかは残っているのも目の当たりにしました。そして今、救い主が生涯の最後の過越のときに過ごされた平和なひとときを振り返ろうとして、この二階の広間にやって来たのです。

高い天井と優美なアーチ造りの広間に集まった私たちは、この広間が、あの聖なる出来事が行なわれた本当の場所ではないことを知りました。私たちが訪れた建物は、フランシスコ修道会の修道士によって、1300年代に、この伝説の場所に建てられたものだったのです。

しかし、場所がどこであろうと、それはどうでもよいことでした。イエス・キリストは確かにこの市のどこかにある二階の広間で、最後の過越の祭を祝い、使徒たちの足を洗い、聖餐を与え、「互に愛し合いなさい」（ヨハネ13：34）と説かれたのです。私たちが礼拝しているのは神の御子であり、その生涯における出来事は紛れもない事実でした。場所はそれほど大した問題ではなかったのです。

私たちは聖書に出てくる旧跡に立ち止まるたびに、グループで一緒に聖典を読み、賛美歌を歌う時間と自由があればよいのにと考えたものです。私たちのグループだけになれる場合もありましたが、後に別の旅行グループがやって来て、やむなく先へ進んだり、迷惑にならないように場所を移動したこともありました。聖地訪問中は時間がとても貴重だったので、できるだけじゃまされないことを願っていました。

二階の広間に全員がそろると、グループの誰かが新約聖書からキリストの言葉を読み、それから全員で『愛し合え』（1989年版賛美歌185番）の歌を歌い始めました。すると、別の見学者のグループ

が広間に入ってきました。その一団は、ひげをはやして茶色のローブに身を包んだ聖職者に引率されていました。聖職者は私の知らない言葉話していました。

正直に言うと、歌っている間、私は歌の内容よりもあとから来たグループのことが気になっていました。彼らが入ってきたので、私たちはその場を去らなければならなかったからです。それに、私たちがそこにいて歌を歌っていたのは、広間で過ごす彼ら自身の短い見物のひとときをじゃまして、迷惑がられるのではないかと思ったのです。

私たちは歌い終わると、静かにその場を去り始めました。私が聖職者とすれ違ったとき、その聖職者は突然私たちの方に向けて、なまりのある英語でひと言、「神の祝福があるように。」と言ったのです。

「神の祝福があるように。」そのひと言に、ありふれたあいさつ以上のものが込められているように思われました。平和よりも様々な偏狭を味わった国の、見知らぬ人からやさしく語りかけられたその言葉は、祈りのようでもあり、祝福のようでもありました。その聖職者は、救い

主の言葉をそのまま歌にした私たちの素朴な歌声に心を動かされたのかもしれませんが、単に同じ礼拝者のグループに親善の気持ちを表わしただけなのかもしれません。いずれにしても、彼の言葉には、あの過越の食事のときに救い主ご自身が語られた言葉の精神が込められていました。それは、私たちがたった今歌ったばかりの、そして私が気を取られていて味わい損ねた歌の精神でもあったのです。

階段を下りて再びにぎやかな市街へと歩を進めながら、私はまたひとりあの歌を口ずさんでいました。そして、歌に込められた救い主の教えをやさしく思い出させてくれたあの見知らぬ友に感謝しました。□



最後の晩餐。カール・ヘンリック・ブロッツ画。デンマーク、フレデリックスボル城付属チャペル蔵。フレデリックスボル博物館の許可を得て掲載。

霊の谷間

ブリガム・ヤング大管長の言葉に、私は強い感銘を受けたことがあります。ヤング大管長が、秘書とふたりの友人と共にくつろいでいるときに、このような質問を受けました。「ヤング大管長、主は私たちのそばにいつもいてくださるとは限りません。また、すべての人を幸福にし、必要を満たしてくれるとも限りません。聖徒たちとて例外ではないのです。それはなぜでしょうか。私たちを助けることは、主にとってそんなにむずかしいことなのでしょうか。」

それに対してヤング大管長はこのように答えました。「人間は、神のようになるべく定められているからです。人は自分が神につき従う者であることを示し、自立しながらも謙虚に行動できるようにすぐれた特性を身につけなくてはなりません。」それからこう言い添えました。「私たちは、暗やみの中にあっても正しい道を歩まなくてはならないのです。」(ブリガム・ヤングの執務日誌、1857年1月28日)

「暗やみの中にあっても正しい道を歩む」ということは、私にとって、とてもむずかしい課題のひとつです。これまで私は、霊的な祝福を豊かに受けているときと、まるで見

捨てられたように感じる時が交互にありました。ある日このことについて深く考えながら、日記に次のように書きました。「教会に入る前の経験から、バプテスマの後には、大きな霊的な高まりを経験するものと思っていた。ところが、過去10年間に実際に体験したことは、その逆だった。人生は、山あり谷あり、ときには砂漠さえある。道に迷い、様々な矛盾と戦わなくてはならなかった。また、福音の原則を頭でわかっていても実行できないことに悩み、答えを見つけるよりも疑問を抱くことの方が多い毎日。ちょうどニーファイのように誘惑や罪悪に取り巻かれて、すぐには出口を見失ってしまいがちだった。」

しかし様々な問題と取り組み、霊的に満たされない苦しみを乗り越えたとき、新たな視野が開け、自分がいかに狭いものの見方をしていたかが理解できた。本当の幸福や満足は、決して安易な快いものではないことに気づき、福音に言われている平安や喜びとはどういうものであるかを、次第に理解できるようになってきた。すべてをご存じの天父が、人生の喜びと同様に人生の苦しみをも与えてくださるのは、決して不思議なことではない。」□

キャロリン・J・ラスマス

私はこれまでたびたびほかの人のために祈り、愛する人々に祝福を与えてくださるよう天父に願ってきました。そして祈り終えたあとで少し黙想して、それから一日を始めるのが常でした。しかし、たまたま自分が大勢の人々に祈ってもらう立場に置かれて初めて、祈りがほかの人にどのような影響を与えるものなのかを知ったのです。

私は3人目の子供を妊娠し、あまり無理をしないようにという医師の指示に従うつもりでいました。ところが、夫はそのとき出かけて町にいなかったため、ふたりの幼い子供たちの面倒は全部私が見なければなりません。そのようなときに、私は突然、悪性の病気に感染してしまいました。それは、お腹の赤ちゃんの命にかかわるものでした。不安になった私は、近所に住む教会員に助けを求め、祝福を施してくれるように頼みました。その人は長老定員会の会長と一緒にすぐに駆けつけてくれました。祝福を受けている間、私は快いみたまの存在を感じました。しかしその日の午後、医師の診察を受けると、私は再び不安な気持ちにおそわれました。赤ちゃんを授かることができなかつたら、

という思いで、その後はずっと泣いて過ごしました。ところが夜になると、昼間の不安は消え、祝福を受けているときに感じたあの同じ慰めの気持ちが広がっていくのを感じたのです。そのとき、家族や友人たちが私を気遣い、私とお腹の赤ちゃんの健康を願ってくれていることに気づき始めたのです。彼らが私のために祈ってくれていること、その祈りがこたえられていることがわかったのです。私は人々の愛に包まれているのを感じ、勇気がわいてきました。

人々の祈りに 支えられて

ダイアナ・ハドソン

そして健康を取り戻すまで、このすばらしい気持ちを失うことはありませんでした。

それから出産までの間、たびたび周囲の人から、「あなたの具合が悪かったときお祈りしていたのよ」と言われ、そのたびに私は「ええ、知っています」と答えました。その後、生まれたばかりの元気な娘を抱いたとき、私は祈りが引き起こす奇跡についてしみじみと考えたものです。□

*ダイアナ・ハドソン姉妹は、アラスカ州アンカレッジ北ステーク部アンカレッジ第11ワード部に所属している。



全世界に出て行って

目的：同胞への伝道の業に積極的に参画するよう
姉妹たちを励ます。

主は天に昇られるに先立ち、すべての国々の民に福音を教えるようにと弟子たちに命じられました。(マタイ28：19-20；マルコ16：15；ルカ24：47-48参照) エズラ・タフト・ベンソン大管長は、現代の私たちに同じ教えを語っています。「世の人々は福音を必要としています。そして私たちは主の戒めにより、……福音を広める責任があります。」(「聖徒の道」1986年7月号, p.77)

いつの日かみずから伝道に出る姉妹も数多くいることでしょう。また自分の子供に伝道に出るように教え、備えをさせる姉妹もいるでしょう。しかし、自分自身が伝道に出るかどうかは別として、私たちは皆、家族、友人、職場の同僚、隣人などに模範を示し、福音を分かち合うことにより、宣教師になることができます。

効果的に福音を分かち合うためには、まず福音を学び、自分自身を備えなければなりません。主は、伝道に出るために準備していた予言者ジョセフの兄のハイラム・スミスに対して、次のような勧告を与えられました。「わが言を宣べんと求むることなかれ。然らずしてまずわが言を得んことを求めよ。然る後、汝の舌ゆるまり、それより汝願わばわれわが『みたま』とわが言とを与えん。」(教義と聖約11：21)

ある独身の姉妹は、教会員ではない職場の同僚に誘われて一緒に食事をしたときに、意外にもその人からジョセフ・スミスとモルモン経について質問を受けました。彼女はそのとき、準備しておくことの大切さを思い知らされました。最初の示現についてなんとか話をし、自分の証を述べましたが、日ごろからもっとよく備えておくべきだったと痛感したのです。

専任宣教師はよく学ぶので、福音への理解をさらに深めていくことができます。私たちも同じことができます。また、だれに福音を伝えたらよいかについて、導きを祈り求めることもできます。ある家族はステーク部宣教師を招いて、モルモン経を伝道の道具としてもっと効果的に用いるためにはどうしたらよいかを教えてください、友人たちとの交わりを深める方法についても話し合いました。そして、伝道活動への理解が深まるにつれ、さらに熱心に福音を分かち合うことができるようになっていきました。

私たち教会員は、「いついかなる時でも、どのような所に居ても、どんなことについても、死に至るまでも神の証し人に」ならなければなりません。(モーサヤ18：9) そのためには自分たちの身の回りや家庭を、祈り、安らぎ、学びの場として、すべての人が主のみたまを感じられる場になければなりません。もし家庭の中に主のみたまが注がれるなら、私たちは家族と共に証を強め、福音について、また福音がもたらす生活の変化について、自分の気持ちを伝える良い備えができるようになるでしょう。□

訪問教師への提案

1. 教義と聖約18：10-16；123：11-17を読み、家庭を美しく整え、安らぎと学びの場、人々に福音を伝える場とするにはどうしたらよいかについて話し合う。
2. 良い宣教師となるための方法、また教会員ではない人やお休み会員と親しくするにはどうしたらよいかについて話し合う。(「家庭の夕べアイデア集」pp.54-57, 82-93, 99-104, 108-26, 141-42, 146, 179, 229-30, 240-41, 252-53, 258-60参照)



夫婦へのアドバイス— 片方だけが熱心な教会員の場合

信仰の不一致に 悩む夫婦へ

レノン・クロスナー・ヒューレット

教 会員ではないトニーと結婚したとき、マリー

はこう思いました。イエス・キリストの完全な福音を持つ教会のすばらしさに、夫がいつまでも反抗し続けられるはずがない、と。マリーにとっては福音も夫も、自分の生活から切り離すことのできない大切なものでした。しかし月日がたち、6人の子供が生まれてもなお、トニーには教会員になる気配は見られないのです。

伴侶が教会員ではない、またはあまり教会に熱心ではない場合、活発な末日聖徒は、伴侶と教会の板ばさみになって悩むことが多いのですが、マリーもそうでした。愛する夫と教会を結びつけることができなかつたのです。

妻となり母となるにつれ、福音はマリーにとって一層大切なものとなってきました。そして何よりも、福音の教えを夫と一緒に学びたいと思うようになりました。あるときには、みずからの証で地を揺るがせ、信頼のおける最良の友である夫が突然目を開いてくれたら、という気持ちにかられさえしました。教会の教えや標準に従うことにより、子供や夫だけでなく自分自身の価値をも認識し、心が豊かになってきたのです。夫にはこのことがわかってもらえないのでしょうか。

マリーは教会に対する自分の気持ちをトニーにわかってほしいと思う一方で、ふたりの間に「教会」というくさびを打ち込むことは、結婚生活を強めるどころか破綻はたんに導くかもしれないということも十分に理解していました。夫婦の間に無理やりに教会の事柄を持ち込み、怒りと反発だけを招いた夫婦の例をこれまでにいくつも見てきているのです。

マリーは、教会を夫の敵にしてしまうような、教会か夫かといった脅迫的な選択は決してすまいと決めました。なぜなら、福音が人の敵になるなどはあり得ないことで、

むしろ人を愛し、理解し、赦す方法を教えてくれるものだからです。

神との個人的な関係とは別に、夫と妻の間に良い関係を築くことが、結婚生活で最も大切なことであると、マリーは思っていました。そこで、トニーを改宗させることを第一の目標にすることをやめ、そのために結婚生活を犠牲にするようなこともやめようと決心したのです。マリーはこう語っています。「10年間悩んだ後、私はトニーに教会に入るように勧めるのをやめることにしました。結婚前、私の両親は私たちの婚約に大反対でした。そして必死になって、結婚を思いとどまらせようと思いました。しかし私たちが結婚したそのときから反対するのをやめ、愛情と援助を惜しみなく注いでくれました。私はもっと前にこうした両親の模範に従うべきだったのです。

そこである日私はトニーにこう言いました。「教会に入ろうと入るまいと、あなたは私にとってほかのだれよりも大切な人だわ。」それ以来私たちは前にも増して幸福感を味わうようになり、平安が得られるようになりました。

トニーは私にやさしくしてくれますし、正しい価値観を

持っています。それにとっても正直です。それなのに私は夫がただ教会員でないということで自分を哀れんでいたのです。私は不平を言うのをやめ、感謝するようにしました。結婚生活にとって最も大切な要素は教会ではありません。愛と寛容、信頼です。教会はあくまでも導き手であって、保証人ではないのです。」

教会の指導者は一貫して、若者たちに会員同士の結婚を勧めています。スペンサー・W・キンボール大管長はこのように指摘しています。「宗教的な違いは広範囲な争いを暗に示している。教会に対する忠節と家庭に対する忠節が衝突するのである。子供たちは何が正しいのかわからないような生活を送ることになる。……共通の信仰がなければ結婚生活の前途には厄介なことが待ち受けているのである。」(「赦しの奇跡」p.249)

こうした理由から、またそれと同様の理由から、すべての独身会員は教会員との結婚を目標とすべきです。しかし時折、何らかの理由で教会員でない人やお休み会員と結ばれる人もいます。そのような場合、教会に関する事柄で自由に選択できるものは限られてきますが、それでもなお忍耐強く愛をもって献身するなどの決意はできるはずで

す。キンボール大管長は、結婚生活の中で何に焦点を置くべきかについて次のように述べています。「主は明白な言葉で次のように言うておられます。『^{まごころ}汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。』(教義と聖約42:22)

『その他の者』ということは、ほかのだれにも、またほかの何ものにも愛着するなということです。

結婚は、絶対的な忠誠、絶対的な貞節を前提条件としています。夫も妻も伴侶に対しては、威厳をもってすべての思いと力、忠誠心、敬意、愛情を傾けて理解するように努めなければなりません。……私たちは『ひたすら神の栄光を目ざす』ように、結婚生活や伴侶、子供たちを全身全霊で愛さなくてはならないのです。』(「奇跡に先駆ける信仰」pp.142-43)

若い教会員ジョアンは、だれが見ても彼女にふさわしいとは思えない男性と結婚しました。その男性は酒におぼれ、お金には無頓着な人でした。間もなく、結婚生活に様々な

不信者の夫は妻によってきよめられており、また、不信者の妻も夫によってきよめられているからである。……なぜなら、妻よ、あなたが夫を救いうるかどうか、どうしてわかるか。また、夫よ、あなたも妻を救いうるかどうか、どうしてわかるか。(1コリント7:14, 16)

問題が持ちあがってきました。しかしジョアンは、幸せになるための魔法を心得ていたようです。

月日がたつにつれて、ジョアンは相手につらくあたりたり、自己弁護に終始したりすることなく、一層忍耐強くなってきました。子供たちにはやさしく接し、両親にはもちろん、子供たち同士でも、愛と思いやりを示すように教えました。そして8人の子供のうち5人までが伝道に出、全員が神殿で結婚しました。そして奇跡的にも、夫は不慮の死に遭う1年前に福音を受け入れ、バプテスマを受けたのです。

そのようなすばらしい変化をもたらしたものは何だったのでしょうか。

ジョアンの妹はこう言っています。「ジョアンは、子供たちやほかのだれにも、父親のことを決して悪く言わせたことがありません。父親がたとえ夜中の2時か3時ごろに帰宅するようなことがあっても、彼女は子供たち全員を起こして、こう言うのです。『お父さんのお帰りよ。さあ、ごあいさつのキスをなさい』と。

子供たちが大きくなって父親の行動に疑問を持つようになると、ジョアンはこう言って聞かせたのです。『お父さんのことを悪く思っちゃだめよ。お父さんはまだ福音のことを知らないんだから。私たちにできることは、お父さんを愛して赦してあげることよ。お父さんはいい人だし我が家の大黒柱ですもの。』

しかし彼女自身は幸せだったのでしょうか。ジョアンの妹はこう話しています。「ジョアンは家族に対して、私たちに対して、まただれに対しても幸福な光を輝かせていました。でも内心はきっと苦しかったに違いありません。夫に教会員になってほしいとどんなに願っていたか、私もよく知っていますから。」

ジョアンは、多くの女性が見捨ててしまうような男性と一緒にになったことについてこう語っています。

「私は今まで、夫を愛し、夫に従いたいという気持ちをなくしたことは一度もありませんでした。夫は愚かなこともしましたが、根は善良な人間でした。人々に愛を示し、困っている人々を助けてきました。失業して行く当てもない人や、ときには家族全員を泊めてあげたこともあります。

私たち家族は本当の愛情で結ばれていました。主人は、私や子供たちを愛し誇りに思ってくれています。子供たちの良い模範を見て、主人は教会に入りました。主人がバプテスマを受けた日は、私の生涯で最も幸せな日となりました。」ふたりがこの日を迎えたのは、結婚して28年目のことでした。

ジョアンのように、私の母親も教会員ではない人と結婚しました。監督は母に、教会員ではない私の父親を何よりも第一に考え、愛するよにとの勧告を与えてくれました。私も弟たちも、母がその忠告に忠実に従うのを見て育ってきました。監督はさらに母に、教会のために外出することが多すぎると父が反対した場合には、教会の活動を制限せざるを得なくなっても決して悩んだり、罪悪感を抱いたりしないよにと助言してくれました。

両親は献身的な態度で、家族を心から愛してくれました。家庭はいつも平和で、だれも相手を裁くようなことはしませんでした。父は教会に入ることはついぞありませんでしたが、教会を大切に考え、決して悪い思いを抱きませんでした。私がベネズエラとコロンビアに伝道に出たときには、経済的な援助をすることを誇りにさえしてくれたのです。

しかしつらいときもありました。神殿で結婚式を挙げた私を、両親が寂しげに神殿の外で待っていた日のことが思い出されます。それでもなおふたりは私の決心を尊重し、私たちの門出を祝う披露宴で、主人と私のそばにうれしそうに立ってくれたのです。私は父親が会員でないために悲しい思いをしてきました。ですから、いつの日か父が教会員になるようにずっと祈り続けています。また、決して父を軽蔑せず、寛容と愛のすばらしい模範を見せてくれた母に感謝しています。

教会を休みがちな会員や教会員ではない人にとって、今までの生活を変えて完全に教会員としての生活に入るのは並大抵のことではありません。しかしわずかながら歩みを進めている人もいます。

晩年になって教会に入った熱心な会員ジョンは、教会に対する熱意のあまり、妻と離婚寸前にまで至りました。妻を説き伏せようとすればするほど、妻の方は頑強に反抗し続けたのです。ジョンの監督はついに彼に、「身を引くよう」勧め、教会の美しいプログラムに彼女自身が目覚めるのを待つよにと助言しました。

その後の何年間か、ジョンは忠実にひとりで教会に通い続けました。すると、妻も少しずつ教会に対して心を和らげ始めたのです。特に、扶助協会のホームメイキングに関心を寄せ、料理や庭の手入れなどいくつかのミニコースの教師を務めるようになりました。しかしなお教会に入る気

持ちにはなりませんでした。

妻のことを語るジョンの顔には、自分たちの結婚生活に対する誇りがうかがえます。ジョンは、同じような状況にある人々にこのように忠告しています。「福音の教えを用いて自分の愛する人を見下げるようなことは、間違ってもすべきではありません。妻に対する私の愛情は永遠に消えることがないでしょう。永遠という長い時間のうちには、愛や模範、忍耐がいつか必ず実を結ぶときがきます。そのうちに愛や寛容さが特別な魔法を見せてくれますよ。」

福音はどんな結婚生活にとっても祝福となるべきものです。使徒パウロは、イエス・キリストを模範として掲げ、次のように言っています。「夫たる者よ。キリストが教会を愛してそのためにご自身をささげられたように、妻を愛しなさい。……妻もまた夫を敬いなさい。」(エペソ5:25, 33)パウロはまた、信者ではない人と結婚した教会員に対し、辛抱強く相手に従うよう勧めています。「不信者の夫は妻によってきよめられており、また、不信者の妻も夫によってきよめられているからである。……

なぜなら、妻よ、あなたが夫を救いうるかどうか、どうしてわかるか。また、夫よ、あなたも妻を救いうるかどうか、どうしてわかるか。」(Iコリント7:14, 16)

「心の内に特別な導きを求めなさい。」こう忠告しているのは、あまり活発ではない伴侶との結婚生活でつらい思いを経験し、それを乗り越えてきたある末日聖徒の女性です。彼女はこう続けています。「もし自分が神と深いかわりを持ち、その関係が確かなものであれば、心の中に平安がもたらされるはずで、できる限りのことを忠実に果たしてきているにもかかわらず、結婚生活が理想とかけ離れていることで罪悪感を抱いている活発な会員がたくさんいるのは、残念なことです。」

カールフレッド・プロデリック博士はこう言っています。「私たちが自分の本分を尽くせば、ほかの何ものも……私たちから王国の祝福を奪う力を持たないと、主は繰り返し約束してくださっている。……さらに、神は祝福を与えてくださるばかりか、私たちが大きな喜びを得られるような方法で祝福してくださるに違いない。……また、最終的に与えられる祝福がどのようなものであれ、それは正義と慈愛に満ちたものであるだけでなく、私たちの想像を絶するような大きな祝福であろう。なぜなら『目がまだ見えず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』(Iコリント2:9)からである。」(「肉体はひとつ思いはひとつ——日の光榮の愛に満ちた神殿結婚」p.57) □

*レノン・クロスナー・ヒューレット：ソルトレーク・コットンウッドハイツステーク部バトラー第14ワード部在住。

脱水症の手当て

脱水症の見分け方や、その予防ならびに手当ての方法を知っておくことは、末日聖徒の家庭においても大切なことです。



世界の至る所で、老若を問わず多くの人々が、脱水症が原因で起こる病気のために苦しんでいます。非常に衛生状態のよい社会においても、子供は嘔吐や下痢による身体の異常な脱水が原因で死亡することがあるのです。この水分が失われた状態を「脱水症」と言います。私たちの身体は、水分を摂取する以上に失うと脱水状態に陥り、生命に危険を及ぼします。

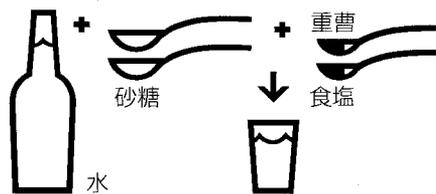
特に子供の場合は、下痢や嘔吐によってすぐに脱水状態に陥ってしまいます。また衰弱が激しく、十分な食べ物や水分を摂取できない人にも脱水症は起こります。脱水症は年齢に関係なく起こりますが、幼児の場合は脱水が急速に進行するので特に危険です。水のような下痢をしている子供は、脱水症の危険があります。

大切なのは、家族の一人一人が脱水症の様々な徴候の見分け方や、その予防と手当ての方法を知っておくことです。脱水状態に陥ると、ふつう口の渇きを訴え、尿量が減り、尿の色が非常に濃くなります。嘔吐や下痢が見られることもあり、腹部の皮膚をつまんでも元に戻りません。赤ちゃんの場合、大泉門（頭部のひし形のやわらかい部分）が陥没します。目がくぼんで涙が出なくなったり、急激に体重が減少することもあります。

世界保健機構（WHO）では、脱水症を起こした患者に対して、特別な飲み物を与えるように勧めています。この補給飲料は、身体から失われた重要な塩分と糖분을補うもので、家庭でできる最もよい手当ての方法です。

脱水症はふつう、ごく初期の症状が見られた段階で水分や補給飲料を十分に与えるようにすれば、防ぐことができます。これは、水のような下痢をしている幼児の場合、特に重要です。

補給飲料



補給飲料は、1リットルの水に、砂糖大さじ2杯、食塩小さじ1/4杯、重曹またはベーキングパウダー小さじ1/4杯を入れて作ります。重曹がなければさらに食塩小さじ1/4杯を加えます。分量を正確に計ることが大切です。

補給飲料は与える前に飲んでみて、涙より塩からくならないようにします。あればオレンジの果汁1個分か、バナナのつぶしたものの1本分、またはほかの果物の果汁などを加えてもよいでしょう。

この補給飲料を脱水症の患者に5分ごとに、排尿があるまで日中夜間を問わず少しずつ与えてください。体が大き



い人の場合は、1日に3リットル以上を必要とします。幼児の場合でも1日に最低1リットル、あるいは水のような下痢をするたびにコップ1杯の補給飲料が必要です。

嘔吐がある場合も、頻繁に、少しずつ補給飲料を与えるようにしてください。飲んだものを全部もどすことはありません。脱水症状が悪化したり、4-6時間たっても尿が出ないようなら、専門家により点滴（静脈注射）をしてもらいます。

補給飲料を与えるときは、食べ物も与えてください。赤ちゃんには母乳やミルクを与えます。国によっては、小さな袋に入った「補給飲料用の食塩」が手に入りますので、水（普通1リットル）に溶かして使います。この補給飲料用の食塩があると便利ですが、手に入らなくても、工夫をすれば家庭で補給飲料を作れます。補給飲料を作るのに必要な材料がない場合は、材料がそろうまで、とりあえず水や果汁、薄いスープのような何も具の入っていない飲み物を与えます。家族の備えとして、必要な材料を家庭に常備しておくともよいでしょう。□

中央扶助協会会長会では、すべての家庭で脱水症の見分け方とその手当ての方法を学ぶように奨励している。扶助協会のホームメーカー活動として、脱水症の見分け方と補給飲料の作り方に関するミニクラスを設けるとよい。

記

私にとっては信じられないような話ですが、人間の脳には千兆ビットの記憶容量があるといわれます。もしそれが真実なら、たとえ10ビットや12ビット程度のエラーが発生するとしても、13の信仰箇条、宣教師のレッスンプラン、学校で学ぶ科学の基礎などを暗記するのに四苦八苦するのはいったいどうしてなのでしょう。

また、記憶が感情、証、理想像、思い、人柄などと密接な関係にあるのも驚くべきことです。福音をもとに、これらの関係について、いくつか私なりに思うことを話してみたいと思います。

記憶と感謝

専門家によると、記憶は私たちの感情に影響を与えることがよくあるといわれます。落胆したときのことばかりを憶えている人は、苦々しい思い出を心の内に秘め、世をすねたような考え方をする傾向があります。自分に向かってきた敵のことばかりを思い出している人は、物事に立ち向かう勇気をなくしてしまうこともあるでしょう。心を傷つけられたときのことだけを考えている人であれば、世間に対して敵愾心を持ち続けることなのでしょう。しかし、楽しいことや励みになるような体験をよく憶えている人は、朗らかな明るい気持ちでいることができます。

私は昔、非常に暗い感じの人と一緒に宣教師として働いていたことがあります。明らかに、彼は何か嫌な思い出を背負い、そのことで心を苦しめているようでした。その思い出が、人生に対する彼の態度に影響を与えていたのです。嫌な思い出によって人生のすべてを不愉快なものにしてしまうとしたら、これほど悲しいことはありません。

私は、森に狩りに行き、神に祈り求めたときのイノスガどのような気持ちだったのかはわかりません。罪の赦しを得られないでいたのだから、かなり沈んだ気持ちでいたに違いないと考えている人もいます。しかし、父親から聞いた永遠の生命に関する言葉を思い起こし、聖徒たちに授けられる喜びについて深く思いめぐらしたとき、彼の心を覆

っていた暗い気持ちは消え去りました。そして祈りと信仰の実践によって、森を出るときには、心を高められ、重荷を軽くされていたのです。(イノス1:1-8参照)

アルマとその友人が神の教会を滅ぼそうと躍起になっていたとき、天使が現われて、彼らに懲らしめを与えました。アルマは、自分のすべての罪を思い起こしたときに、永遠の責苦を感じたと言っています。しかしアルマがキリストの贖いに関する父親の予言の言葉を思い出したとき、驚くべきことが起こりました。アルマは次のように書き記しています。「このように心の中で願うと、ごらん、私はもう少しも苦痛を覚えず、再び自分の罪を思い出して苦しむこともなかった。

ああ、この時私の感じた喜びと、私が見た驚くべき光とはいかにも大きかった。まことに、私はこの時、前に感じた苦痛に等しいほどの喜びに満ちたのである。

わが子よ、お前に言うが、私がその時に感じたほどの劇烈な苦痛がこの世にまたとあろうか。またその時に感じたほどの甚しく美しい喜びがこの世にまたとあろうか。」(アルマ36:19-21)

皆さんにお尋ねしたいと思います。過去に経験した心の傷や痛手にとらわれるあまり、ほかの事柄が何も見えなくなっているというようなことはないでしょうか。それとも、建設的で前向きなことを考え、人生を明るく晴れやかなものにしようとしているのでしょうか。皆さんの記憶は、皆さんの気持ちにどのような影響を与えているのでしょうか。何を思い起こし、何を考えるかは皆さん自身の問題です。自分の気の持ち方を決めるのは、自分自身にほかならないということを絶対に忘れないでいただきたいと思います。

記憶と証

私たちは求道者に対して、モルモン経を読み、その内容について祈り、証を得てくださいとお願いすることがよくあります。そのときのポイントとなるのがモロナイ書の10章3-5節です。普通私たちは、「この本を読んで、それが

憶



読んだ事柄が互いに脈絡のある事柄として頭の中に入ってきて初めて、精神が啓発され、真理を悟ることができるようになります。その過程において、精神が活気づけられ、記憶が目覚め、みたまのささやきに感応する準備ができるのです。

真実かどうかを神様に尋ねてみてください」と言い、それから、モルモン経に書かれているとおりに、「聖霊の力によってそれが真実であることを知ることができます」と約束します。

私はそのように言う人々に対して、それが間違っていると断言するつもりはありません。しかしもっと効果的な方法を提案したいと思います。聖句を読んで、証を得るための4つの段階を強調したいと思います。その中のふたつはややもすると忘れがちなものです。

「ごらん、私はあなたたちにすすめたい。あなたたちがこの記録を読むことを神が許したもうならば、あ

なたたちはこの記録を（１）読む時に、アダムが造られてからあなたたちがこの記録を受けるまで、主が世の人々にどれほど憐みを垂れたもうたかを（２）思い起して心の中に（３）深く考えてほしい。

また……それが真実なものかどうかを……（４）神に問え。……神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」（モロナイ 10：3-4）

私はここで「思い起こす」という言葉と「深く考える」という言葉を強調したいと思います。それは、いくらモルモン経を読んでも、そこに書かれていることが、どのような意味で神のみこころにかなうのかを「思い起こし」「深く考え」なければ、啓発されるどころか、混乱する結果になってしまうことが多いのではないかと強く感じるからです。読んだ事柄が互いに脈絡のある事柄として頭の中に入ってきて初めて、精神が啓発され、真理を悟ることができるようになります。その過程において、精神が活気づけられ、記憶が目覚め、みたまのささやきに感応する準備ができるのです。

アンモンはラモーナイ王を改宗に導きましたが、そこに至るまでの過程において、王に数多くのことを教えています。そのひとつについて、モルモン経には次のように書かれています。

「アンモンは……世界とアダムが造られたことから話を始め、人類の始祖の墮落に関する一切のことを教え、予言者たちの作った人類の歴史と聖文とを……話して、その歴史ならびに聖文を含む書物を王に見せた。」（アルマ18：36）

アロンもアンモンと同じように、アダム、墮落、贖いの計画、キリストの贖罪などについて、ラモーナイ王の父に教えを宣べ伝えました。これらはすべて、大局的な理解を得させ、証の基を得させるためになされたことでした。

証が弱くなったり、道の途中でつまづきそうになったときに、主の憐れみ深さを思い起こそうとしない人がいるのはなぜでしょうか。前向きの姿勢をもって主の慈悲を思い起こすならば、ラモーナイ王とその父が味わったと同じ癒しを体験できることでしょう。神の慈悲について深く考える人は必ずや霊を鼓舞されることでしょう。そしてキリストの永遠の賜を思い起こす人は、真の癒しを受けるに違いありません。

記憶と模範

ほとんどの人は、ほかの人から強い感化を受けたという経験をしたことがあるはずです。私は、それはそれで当然なことだと思います。ジェームズ・E・タルメージ長老は天上の大会議における御父の原案について、「地上に住む者のためになる教訓と、犠牲と言う模範の及ぼす感化によって説得し、その後は自ら自由に選ぶに任す」ものであったと書いています。（「信仰箇条の研究」p.71）

人はだれでも、心の中に理想の人物像や英雄像を持っているのではないのでしょうか。理想の人物像をたくさん持っている人もいるでしょう。そして、そのような人々について思いをはせ、自分に必要な靈感を得ることもあるでしょう。非常にむずかしい問題について決定を迫られた場合には、特にそれが言えます。

ヒラマンは記憶と理想像の大切さをよく理解していました。彼が息子たちに与えた次の言葉から、それをうかがい知ることができます。

「私はエルサレムの地からきた私たちの先祖の名をお前らに与えた。このわけはお前らが自分の名前を思うたびに先祖のことも思わせ、先祖を思うたびに先祖の行いもまた思わせ、先祖の行いを思うたびにその行いの善かったことが言伝えにも記録にもこのこっているのを知らせるためである。

それであるから、わが子らよ。私はお前たちに、先祖について言い伝えられ書き伝えられたと同じことが、お前たちについても言い伝えられ書き伝えられるように善い事をしてもらいたい。」（ヒラマン5：6-7）

行状の良い人々に関する思いで、自分の頭の中をいっばいにするようなことをしてはいけません。そのようなことをすれば、自分自身をおとしめるだけです。それよりも、徳を具えた偉大な人物を選びすぐって、その姿を心の中に刻み込むのです。そして、そのような人々について考えるときには、彼らの足跡に倣うとともに、さらに彼らをしのご人物になるという決心をしてください。

記憶と心の中の思い

私たちの心の有り様は、おもに、その中に何を取り入れるかによって決まってきます。これはとりたてて驚くべきことではありません。皆理解していることではないでしょ

あなたの手にあるパレットと絵筆で、
思い出を美しく彩りなさい。

うか。にもかかわらず、人々は、あいもかわらず、いかがわしい読み物を読み、不道徳な映画を見、みだらな歌詞の歌を歌い続けています。知ってか知らずかを問わず、そのようなことをしていれば、汚れた記憶を心の中に蓄えてしまうようになります。

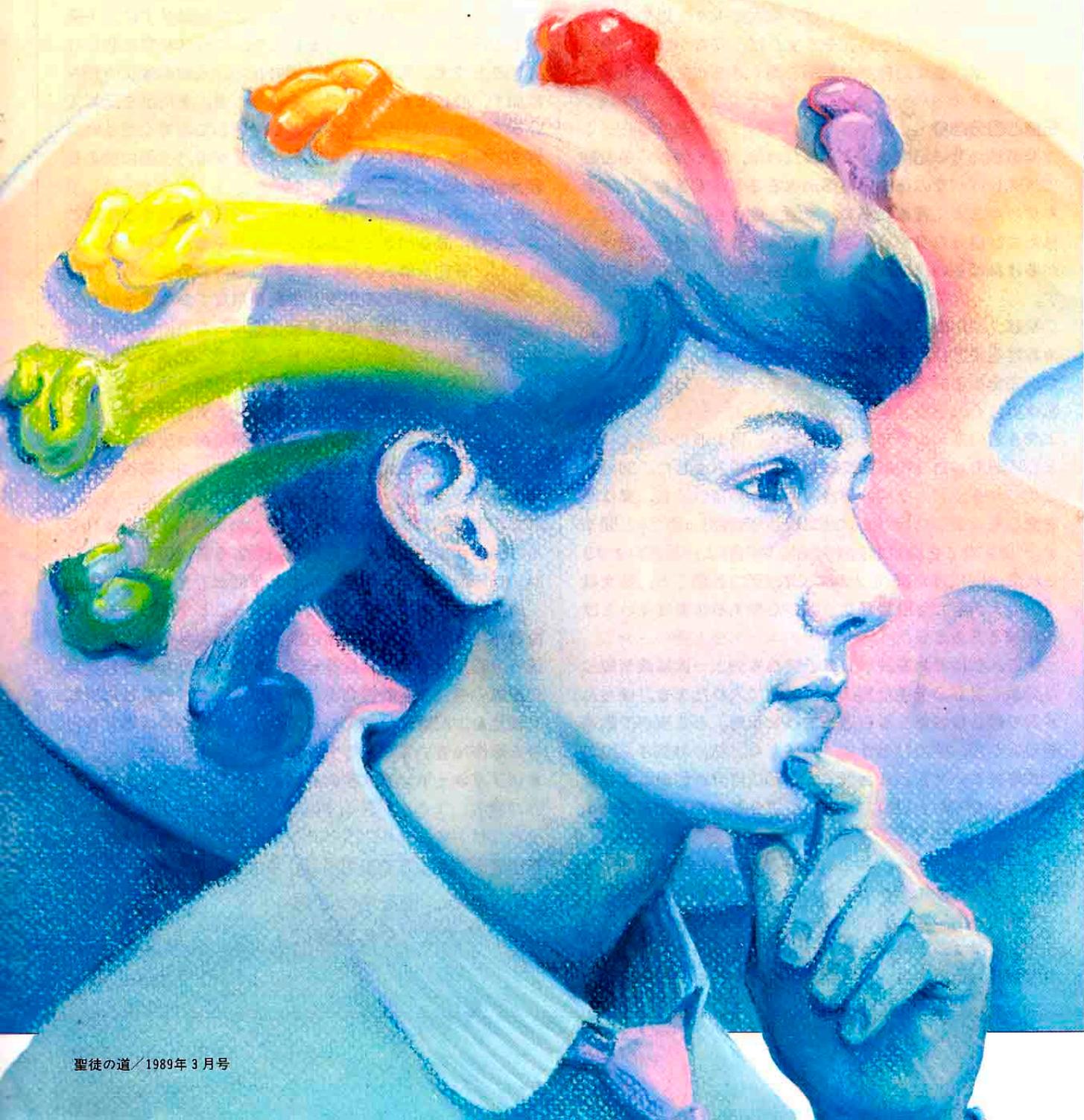
教会員の中に、神の次の戒めを公然と無視する人がいるのは理解に苦しむところです。

「……汝の腹中を慈愛にあふれしむべし。絶えず徳を以

て汝の^{おもい}想を飾るべし。然る時は、汝の自ら信ずること神の前に強くなりて、神権の教理は天より下る露の如くに汝をうるおさん。

聖霊は常に汝の^{とも}伴侶となり、汝の^{しやく}笏は真理と正義の変ることなき笏となり、汝の支配は永遠の支配となりて強いらるることなく永遠に汝に流れ込まん。」(教義と聖約121:45-46)

この聖句の中には、自分自身への確信、神権の教理、聖



霊の導きなど、黄金の鉱脈にもたとえられる、素晴らしい約束がなされています。健全な理性を持っていながらこれらの約束にあずかる権利をみずから放棄してしまうような人がいるでしょうか。

有害な考えや退廃的^{たいはい}な思いにとらわれてはいけません。それらはサタンの鉄の鎖と同じように、強力なものとなり、人を無力にしてしまいます。

記憶と思いは分かち難く結びついているものであり、互いに強く影響し合っています。ですから、徳をもって思いを飾り、受けた祝福を数えあげ、偉大な人々の思想に親しむように努めてください。そうすれば、安らかな思い出を囲い入れた、あなた自身の聖所を築くことができます。

記憶と自分自身

神が私たちに記憶を与えられたのは、寒くつらい冬の日、美しいバラの花を思い浮かべることができるようにするためだとよく言われます。記憶というものがなければ、私たちは自分自身を築くことができません。豊かな思い出が多ければ多いほど、豊かな自己を築くことができます。

私は、ほかの人の助けを得て、自分の半生の歴史をまとめあげるまでは、記憶についても、また自分自身についても、完全な理解を得ることができませんでした。あるとき、私は妻にその下書きを渡し、「私のことについては、私自身よりも君の方がよく知っているから、目を通して直すべきところがあったら指摘してほしい」と頼みました。30分ほどしてから、どんな進み具合かと確かめにいくと、妻は涙を流していました。「そんなにひどい内容だった？」と聞くと、「そんなことないわ、素晴らしい内容よ」と言います。それで、「どこか訂正を入れてくれた？」と聞くと、彼女は「いいえ、どこも直したり、削ったりする必要はないと思うわ」と答えました。

後に、私はそれを製本して子供たち一人一人に渡しました。私も妻も、子供たちは多分本棚に入れたまま、ほとんど読みはしないだろうと思っていました。ところが、数週間してから、娘のひとりに「お父さん。私、お父さんのこと大好きよ」と言われたのです。私は自分が何かまずいことでもしたのかと思い、どういうことなのかと聞いてみま

した。娘の返事はこうでした。「お父さんが自分のことを書いたあの本のことよ。今も読んでいるけど、私はあれを読むまでお父さんがしてきたこと、経験してきたことを何も知らなかったわ。」

皆さんは古代の記録に関して、それによって民が様々な事柄を記憶にとどめることができたということを読んだことがあると思います。確かにそのとおりです。様々な記録を通して、言葉や真理が守り伝えられ、後世の人々が靈感を受けることができたのです。

皆さんが子孫に書き伝えるべきことを記録せずに、子孫がその祝福にあずかれないとしたら、これは非常に悲しむべきことです。皆さんは子孫に対して、人生の諸々の恵みに加え、心に深く思い、感じていること、また証を伝えているでしょうか。ぜひそのことを確認してみてください。皆さんには、それらをほかの祝福とともに、子孫に伝える義務があるのです。

皆さん自身とイエス・キリストの福音に関連する記憶については、語るべきことがほかにたくさんあります。たとえば、誓約や儀式を思い起こすことの必要性、あるいは裁きの日に記憶がどのような役割を果たすかなどという主題も考えられますが、私はきょうそれらの事柄についてはまったく話していません。

皆さんが、悔い改めと神の約束への信仰を通して、自分自身を清められるようにお祈りしています。神はこう約束しておられます。「およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」(教義と聖約 58:42)

また、皆さんの名前が義人の中に連ねられ、「主を畏れてその名を尊びし者たちの行いを記念する書」(IIIニーファイ 24:16)の中に書き留められるようにお祈りしています。

何を記憶するかが非常に大切であることを証します。記憶は私たちの心の持ちように大きな影響を与えるとともに、証とも密接なつながりを持っています。私たちは自分自身の記憶の中に、義の模範となる人々の姿も含めなければなりません。記憶は心の思いを形作り、最終的には私たち自身を形作っていくからです。□

*ブリガム・ヤング大学における講話より。

記憶と思いは分かち難く結びついているものであり、互いに強く影響し合っています。ですから、徳をもって思いを飾り、受けた祝福を数えあげ、偉大な人々の思想に親しむように努めてください。

疑問の余地なし

ジェヌビエーブ・ファン・ワーヘネン

友人に誘われて船遊びに行くと仮定します。不運なことに事故があって、船が沈み始めました。おぼれられないようにするには、何かにつかまらなければなりません。船の中には、浮き輪、救命胴衣などをはじめ、様々な救命具があります。さあ皆さんはどうしますか。一番手近な所にある救命具をつかみますか。それとも、救命具の要素がある物ならなんでもいいと妥協してしまいますか。救命具と名のついている物ならみな同じだと思ってはいませんか。

つい最近まで、私は救命具ならみな同じだろうと考えていました。しかし、今はまったく違う考えをもっています。では何が私の考えを変えたのかについて述べてみたいと思います。

あるとき、私は防災をテーマにした、安全機器の展示会に行きました。私が最も興味をひかれたのは、水難事故の防災用具でした。なじみ深い様々な救命具が陳列されていて、その一つ一つに簡単な説明を書いたカードが添えられていました。

ところが、その中には安全基準に関して「適格」と書かれているカードもあれば、「不適格」と書かれているものもありました。私は驚きました。私はそれまで、救命具はすべて適格と認定されたものであり、みな非常時には立派に役立つものと考えていたのです。展示の責任者が次のように話していました。「救命具なら何でも安全だと考えている人が多いようですが、それは単なる思い込みで、非常に危険なことです。命を救ってくれるどころか、中には、水を吸い込んで重くなり、おぼれる原因になるような物もあるのです。」

彼は、適格とされているいくつかの救命具の実験をしてから、「助かりたいと思うなら、こういう物だけを使うことです」と話してくれました。

私は家へ帰る途中、車を運転しながら、救命具と名のつく物をすべて同じように考えていた自分の愚かさをつくづく感じました。そして、これと同じような危険性のある勝手な思い込みを、ほかにもしていないだろうかと思いました。人はどう生きるべきかということについても、実に

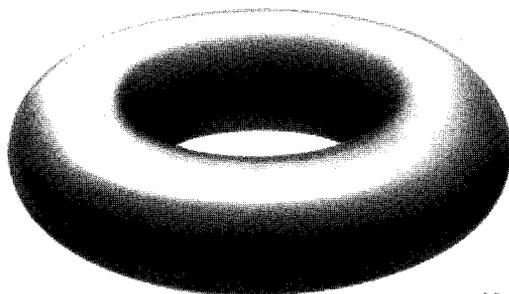
様々な考えがあります。そのすべてが人の救いを目指しているわけではありません。中には死の罠に通ずるような哲学さえあるのです。

現代人に人気があるのは、「自分の利益を求めよ」という人生哲学です。「良いと思ったら、考えるのは後にして、すぐ実行」などというのも、よく聞く言葉ではないでしょうか。

捕まらなければ、うそをついても、だましても、盗んでも一向にかまわないなどと言う人もいます。また、人生の成功の度合いは稼いだお金の額によって決まるという哲学も、人々の間に蔓延しています。このような教えは、多くの人に受け入れられ、非常に魅力的に思えることもあります。決して私たちを救ってはくれません。

これらの教えを、イエス・キリストとその予言者が教えた福音の原則と比較すると、まったく違うものであることがわかります。この世の教えと、次のような教えを比較してみてください。「何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」(マルコ12:31)「罪悪は決して幸福を生じたことはない。」(アルマ41:10)「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。」(デビッド・O・マッケイ)

様々な教えがありますが、そのすべてが人を永遠の生命に導くものではありません。救い主は、人が作った教えには、救いをもたらす力がないと教えられたことがあります。「この民は……人間のいましめを教として教え、無意味に

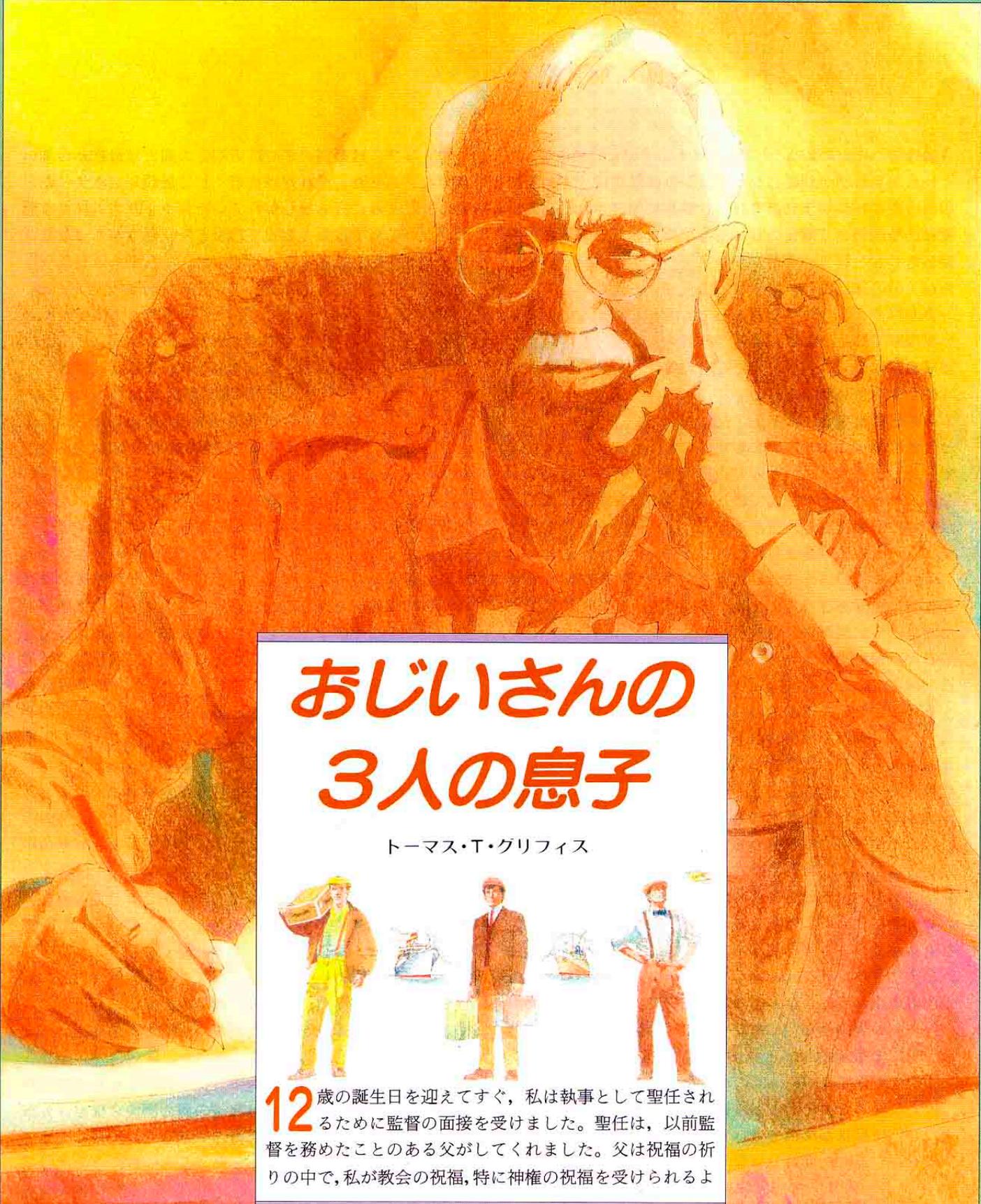




わたしを拝んでいる。」(マタイ15：8-9)

主はまた、次のようにも教えておられます。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨^{みひね}を行う者だけが、はいるのである。」(マタイ7：21)

救いの計画、また人を永遠の生命に導く道はひとつしかありません。世の中には様々な事柄がありますが、そのすべてについて「疑問の余地なし」とする考え方はしないようにしてください。正確な知識を得、イエス・キリストと予言者の教えを実行し、神の義のよろいを身にまとうてください。水難事故の予防にしても、永遠の救いに関する事柄でも、本当に人に救いを与え得るものを選んでください。□



おじいさんの 3人の息子

トーマス・T・グリフィス



12歳の誕生日を迎えてすぐ、私は執事として聖任されるために監督の面接を受けました。聖任は、以前監督を務めたことのある父がしてくれました。父は祝福の祈りの中で、私が教会の祝福、特に神権の祝福を受けられるよ

うにしてくれた人々のことを感謝するようにと述べました。

けれどもわずか12歳になったばかりの私には、その意味がまったくわかりませんでした。執事に聖任された次の日曜日、私は初めて聖餐のパスを行ないました。母は私の服装がきちんとしているかどうか気をやきもきさせていましたが、父の方はただニコニコして見ているだけでした。

実を言うと、それは私にとっても胸がわくわくする楽しい出来事でした。執事であることは大人になったという証拠であり、自分は執事なんだと考えるだけで、うれしくなっていました。

その日昼食をとったあと、父が家族の記録を手を、私のところにやって来て言いました。「これはウェールズに住んでいたおまえのおじいちゃんの記事で、自伝のようなものだ。これをおまえに読んでほしいと思ってね。特にこの最後のところをね。」そう言うと、父はその記録を私の前のテーブルに置いていきました。

12歳の少年が、外に行けば遊び友達もいるのに、なぜそんな昔の記録を読む気になったのでしょうか。その理由はただひとつ、父が望んだから、ただそれだけのことでした。ここから読んでほしいというところに、父はしおりをはさんでおきました。

そこにはこのように書いてありました。

「11月、外は寒い。森の木々の間を風がヒューヒュー吹き抜けていく音が聞こえる。暖炉の前で、母の使い古した毛糸の肩掛けをひざに掛け、皮の背もたれのついた古びたいすに座っている。わきにある小さなテーブルの上で、罫の入った便箋にこれを書いている。罫の間隔が広いのは視力が昔ほどよくないためだ。ゆらゆらと燃える暖炉の火を見ていると、いろいろな思いがわきあがってきて、いとしい妻と共に教会に入ったころのことがよみがえってくる。私たちがウェールズの海岸で、バプテスマを受けるために水の中に入ったときは、風が海に吹きつけていた。ベスは健康がすぐれず、しかも身重だったので、冷たい水が自分の体にもお腹の赤ん坊にも悪いのではないかと心配していた。そこで監督長老が、すべてうまくいくよう、また冷たい水が悪い影響を与えることのないようにと妻を祝福してくれた。すると、そのとおりになった。私たちが耐えた迫害についてはほかの所で述べたが、ここでは3人の息子のことを書いておかなければならない。

ウィリアムは最初の子で、母親との間には最初から強いきずながあった。それだけに若くして母親を突然失ったときは、悲しみに打ちひしがれていた。ウィリアムはもう屈託のない若者ではなくなってしまった。黙りがちになり、自分の殻に閉じ込められるようになった。そしてある日、ウィリアムは私のところに来るところ言った。「お父さん、ぼくは家を出てアメリカへ行くことに決めました。聖徒たちのいるシオンに行きたいんです。ビザはもう申請しました。ビザができたなら出発します。」それから1年ほどしてビザが与えられ、ウィリアムは出発の準備をした。

出発の日が来た。その日のことをどう表現したらよいか、わからない。私は丘の中腹にある我が家の戸口に立って、ウィリアムがトランクを肩に担いで丘を下って行くのをじっと見ていた。もう二度とあの子に会うことはないだろう、と思いながら、自分自身の一部がもぎ取られていくような気持ちだった。

あの子がいないのをどんなに寂しく思ったのだろうか。私の気持ちは、あたかも窓越しに見える山々の上に太陽が昇らなくなったかのようであった。ウィリアムは私の長男だったし、ウィリアムを育てることによって、私自身が信仰を深め、謙虚さを学んだのだった。また、ウィリアムは我が家の平和をつくり出す子でもあった。日がたち、私の心の痛みは和らいだ。ウィリアムはまめに手紙をよこし、聖徒と共にいられる喜びについて書き送ってきた。

それから1年ほどたったある日、夕食を食べているときに、次男のジョンが私に話しかけてきた。「父さん、ぼく、アメリカの兄さんのところへ行くことにしたよ。ビザの申請もしてあるんだ。」

私はまだあどけない顔をしたこの子をじっと見つめた。兄とはずいぶん違って、少し巻き毛の黒っぽい髪をしたジョンはハンサムな子だった。笑うと愛くるしく、女の子にとっても人気があった。なぜかジョンを見ると私は自分の若いころを思い出した。私も少し巻き毛の黒っぽい髪をしていて、女の子に人気があったからだ。でもベスに出会ったとたんすっかり心を奪われてしまった。

私は鉄道の駅まで行き、息子と抱き合っただけを告げた。列車が駅に入って来たときは息子の肩に涙をこぼし、列車が出て行くときはまるで我が身の一部もその列車に乗って行ってしまったような思いがした。

それからとぼとぼと歩いて家へ帰ったが、これほど寂しい思いをしたことは生涯二度となかった。悲痛な思いが込みあげてくるのを必死でこらえようとした。最も愛する末日聖徒イエス・キリスト教会に、ふたりの息子を取られたようなものだった。

三男のアイバーはまだ村に残っていたが、私とは長く暮らせない運命だった。予定日より2カ月も早く生まれたアイバーは、クッションの上に乗るほど小さかった。大人にはなったが、心臓病をわずらっていた。アイバーは我が家の詩人だった。体が弱くても、いつも明るかった。家の裏手の森の木々に歌いかけていた声が今もなお聞こえる。心臓の発作を起こすほんの数日前だった。その日私たちは一緒に歩いて草原まで行き、谷間を見渡した。アイバーが私の手を取ってそっと言った。『父さん、聞いてごらんよ。』そこで耳を澄ますと、谷を渡ってカッコーの悲しげな鳴き声が聞こえてきた。『きれいでしょ。カッコーは春の訪れを告げるんだ。もうすぐ草原もひな菊の花で白く染まるし、鳥たちもうれしそうにさえずる。父さん、神様が造られた世界はすばらしいね。』

アイバーは眠るように死に、丘の小さな墓地に眠るベスのそばに葬られた。

アイバーの葬式は村では大きな出来事だった。末日聖徒の葬式は初めてのことで、好奇心からやって来た人もたくさんいたようだ。しかし、ほとんどの人はアイバーへの愛と尊敬のゆえに来てくれた。黒のスーツとシルクハットに身を包んだ葬儀屋のジョーンズ氏が、棺ひつぎを乗せた黒の2頭立ての馬車を走らせてくれた。

墓地まではほんのわずかの道のりで、アイバーの死を悲しむ人々が馬車のあとに続いた。やがて村の人々が歌い始

めた。初めその声は夏の山を渡るそよ風のように静かだった。すると突然『心満てるまでわれを養いたまえ』という大きな声が出て、村人たちの歌声は、岸壁に砕ける怒濤どたうのように高まっていった。ああ、我が村人たちの嘆きの歌は今も私の心に響いてくる。息子とベスの耳にも届いているに違いない。

葬式が終わって帰宅すると、私は息子たちから来た手紙を何通か引き出しから取り出して読み返した。長男はこんな風にしてよこしていた。『私は今大祭司グループリーダーをしており、神殿のスーパーバイザー（神殿業務各部門の担当責任者）もしています。父さんが福音を教えてくれたことをとても感謝しています。』

次男の手紙にはこのようであった。『きょうは胸がいっぱいです。ワード部の監督に召されたのです。福音を教えてくれた父さんに何と言って感謝してよいかわかりません。』

そろそろ暖炉の火が燃え尽きようとしている。手も疲れ

てもうこれ以上書くことができない。』

そのあとには父の手でこう書かれてありました。

「おまえのおじいさんはそれから数日後に亡くなり、おばあさんと三男のそばに葬られたんだ。」

読み終わって見上げると父がそこに立っていました。父の目は涙でうるんでいました。私も同じ思いでしたが、12歳の少年がいつまでも悲しみに浸っているわけにもいきませんでした。

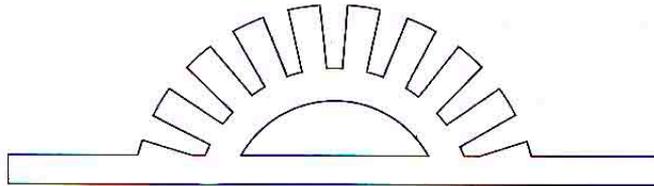
「お父さん、お父さんが次男だったのでしょ。」私は聞きました。

「そうだよ、次男だった。」

「髪の毛はもう黒くないけど、まだ少しカールしているね。」□







希望 の メッセージ

「主のようになろうと
いう目標を心に抱
いてください。そうすれば、
主を知り、主のみこころを
行ないたいと心から求める
ことによって、沈んだ気持
ちを払い去ることができます。」(エズラ・タフト・ベ
ンソン大管長)

「さて私の子よ。キリストに忠誠であれ。願わくは……
キリストがお前を慰さめ励ましたもうように、ま
たキリストの苦しみとその死と、私たちの先祖にその御姿
を現わしたもうたことと、その憐みとその忍耐と、その栄
光と、永遠の生命を授かる希望とは、お前がいつまでも記
憶に留めておくように。」(モロナイ 9 : 25)

「聖なる救い主のメッセージの中には、すべての人に
希望をもたらす言葉が語られています。その言葉
は、自分は霊的に貧しい人間であると考えている人、また
自分は人々に愛されていないし、その価値もないと考えて
いるような人も含め、すべての人に向けられたものです。
それは、人は新たに生まれ変わることができるというすば
らしいメッセージです。霊において生まれ変わる人にはす
ばらしい自由が与えられるのです。」(ジェームズ・E・フ
ァウスト長老)

「さて、私の愛する兄弟たちよ、私たちの憐み深い神
は、これらの事について大そう偉大な知識を与え
たもうたから、私たちは神を心に思い起して、私たちの罪
を捨てようではないか。」(II ニーフアイ 10 : 20)

「破は、^{れんち}廉恥な行ない、罪惡、この世で行なわれている事
柄を見て、落胆してはなりません。それらはキリ
ストとは一切無縁のものです。それらのゆえに、悲しみ嘆
いてはなりません。主に高めていただくようにしてくださ
い。主が私たちのために示されたすべてのものを、いつま
でも皆さんの心の中にとどめてください。」(マリオン・D・
ハンクス長老)

「過去がどのようなも
のであったにせよ、
私たちは自分の将来を汚れ
のないものにすることがで
きます。」(ヒュー・B・ブ
ラウン副管長)

「日々の生活の中で福
音を實踐し、日の

光栄の王国への道をしっかりと歩むなら、私たちは前進し、
向上することができます。前途には険しい道も待ち受けて
いるでしょう。しかし救い主イエス・キリストは、常に私
たちと共に歩むと約束してくださっています。皆さんの希
望が、ほかの多くの人々の希望とひとつになるとき、混乱
した世の中に、イエス・キリストの福音による光と希望を
もたらすことができます。」(中央若い女性会長アーデス・
G・カップ姉妹)

「どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと
平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によっ
て、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように。」(ロ
ーマ 15 : 13)

「私たちは今この場でキリストにあって望みを抱いて
いる。主なるキリストは私たちの罪のためにご自
分の命を捨ててくださった。その主の贖いと福音により、
私たちの罪はバプテスマの水で洗い流され、あたかも火で
焼かれるように私たちの体から焼き尽くされる。そして、
私たちは清い者となり、明らかな良心を抱いて、人知では
とうてい測り知ることのできない神の平安を得るのである。
(ピリピ 4 : 7 参照)

私たちはキリストの福音の律法に従って生活するとき、
この世の富を得、また心身の健康を維持することができる。
今でも私たちは十分福音の恵みを享受している。……私た
ちはキリストにあって永遠の行く末に望みを抱いている。」
(スペンサー・W・キンボール大管長)

福音の光

アジア地域会長会第一副会長

アドニー・Y・小松

数年前、新しくできた礼拝堂を奉獻するために、私は割り当てを受けて南太平洋のある島を訪れました。夕方になって、地元の指導者たちと一緒にその建物に近づいて行くと、驚いたことに、中が真っ暗です。

建物に入ると、教会員は全員すでに礼拝堂に着席していました。私たちは、なぜ照明が消えているのか尋ねました。監督の話によると、その日の昼過ぎごろには、建築責任者が建物の検査を行ない、献堂式のために準備万端整っているのを確かめたと言います。ところが、式の始まる時刻が近づくと、周囲の家々には明かりがともっているのに、教会の照明はつかなくなりました。考えられる限りの故障の原因が調べられましたが、やはり、照明はつきませんでした。そこで、私は地元の指導者たちと話し合い、このまま献堂式を行なうことにしました。

礼拝堂の前に置かれた石油ランプの光の中でプログラムが進行していくにつれ、私は心の中で、このような暗やみの中で行なわれる献堂式は、教会歴史上初めてのことに違いないと思いました。

その場に集まったすべての善良な兄弟姉妹たちが、主が明かりを与えてくださって、献堂式を無事終わられるように、心の中で私と一緒に祈っていたと思います。

ひとり、またひとりと、暗やみの中で話者が替わっていきます。聖歌隊も美しい賛美歌を歌ってくれました。そして、最後の話者として壇上に立った私も、暗やみの中で話をしました。次いで、これから捧げる献堂の祈りに心を向けるよう会衆に注意を促すと、突然、礼拝堂の明かりがついたのです。私たちは、このすばらしい祝福を与えてくださった主にどれほど感謝したことでしょう。私は胸が熱くなり、この大きな祝福のために、柔和で謙遜な気持ちにさせ

られました。しかし、礼拝堂の照明も、私たちの心に生じた愛の光とは比較になりませんでした。

この出来事に接して、私は予言者モロナイの次の言葉を思い出しました。「さて私モロナイは少々言いたいことがある。私は、信仰とはまだ見ない物事を望むことであると世の人に教えたい。それであるから、あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないと言わなければならないからである。……世の人々の中に信仰がなければ神は人の間に奇蹟を行うことができないので、人々が信仰してからでないと言わなければならない。」(イテル12:6, 12)

そうです。主は、私たちが希望を持って祈り、信仰が試されているときでさえも、祝福を与えてくださったのです。

人生に光を求めている人々は、ほかにもいます。ひとりの青年が、様々な犯罪を重ねて刑務所に収容されてしまいました。脱獄を謀ったこともありましたが、結局すぐに捕まり、再び収監されてしまいました。彼の人生は本当に暗く惨めなものでした。ところが、思いやりのある監督が絶えず支え励ましたおかげで、この青年は生き方を変え、キリストのみもとに戻る決心をしたのです。柔和なへりくだった心をもって、彼は悔い改めるようになり、聖霊が彼の心を開いていきました。

刑期を終え、刑務所を出ようとする時、この長い更生の年月の間青年を支え励ましてくれた監督が、門のところで出迎えに来ていました。監督が連れてきた青年の両親や肉親の兄弟姉妹たちも、腕を広げて彼を迎え、心から出所を喜び合いました。彼は、自分を支えてくれた監督や家族に、どれほど感謝したことでしょう。彼らは、青年の非行のためにつらい生活に耐え、幾晩も眠

れぬ夜を過ごしたはずですが、それでも、彼らの信仰は揺らぎませんでした。そして本当に奇蹟が起きたのです。現在この青年は、ワード部の長老定員会会長を務めています。

この青年の人生を、霊の暗やみから真理と光明の世界に導いた大きな力は何だったのでしょうか。それは、監督が示したキリストの純粋な愛でした。このキリストの純粋な愛は、仁愛を意味します。

予言者ニーファイは次のように語っています。「従って主なる神は、人は皆慈悲すなわち愛の心を持たなくてはならないと言う命令を与えたもうた。もしも人に愛の心がなかったならば人は何の価値もない。それであるから、もしも人が愛の心を持っているならば、シオンで働く者を死なせてはおかないであろう。」(IIニーファイ26:30)

この青年の家族が示した信仰と勇気も、忘れてはなりません。彼らは、数多くの試練と心の痛みを耐え、苦難の果てについに、腕を広げてこの若者を迎えることができたのです。予言者モロナイは、次のように指摘しています。「レーマン人の心を改めさせてかれらに火と聖霊のバプテスマを受けさせたのはニーファイとリーハイとの信仰であった。レーマン人の間にあの大きな奇蹟を行なったのはアンモンとその同僚たちの信仰であった。キリストが降誕したもうさきの者でも、キリストが降誕したもうたあとの者でも、奇蹟を行なった者はみなその信仰によって奇蹟を行なった。……いつ何時でもまだ信仰のない中に奇蹟を行なった者はない、すべて奇蹟を行なった者はまず神の御子を信じた。」(イテル12:14-16, 18)

予言者モルモンもこう説いています。「奇蹟は信仰によって行われ……る。……キリストの御言葉によれば、キリストの御名を信ぜずに救いを得る者はない。……それであるから、もし人に信仰があるならばその

人に希望もまたなくてはならない。信仰がなければ希望もまたないからである。よく言うておが、その人の心が謙遜であって柔和でなければ信仰も希望も持てるはずがない。……人がもしその心が柔和であってへりくだり、また聖霊の力によってイエスをキリストであると認めるならば、その人に愛がなくてはならない。」(モロナイ7:37-38, 42-44)

現在、私たちは、使徒パウロがコリント人にあてた手紙を通して、愛の大切さを知ることができます。「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢つづみと同じである。たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、いっさいは無益である。愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、不法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。愛はいつま

でも絶えることがない。」(Iコリント13:1-8)

教会の中には、愛に満ちた働きをするためのたくさんの機会があります。愛に満ちた最も偉大な行為のいくつかは、友情の手を差し伸べることから始まります。あるワード部の大会で、年配の兄弟がひとつのすばらしい模範を紹介してくれました。

この善良な兄弟は日曜学校の会長で、証をするように依頼を受けたのでした。彼は12年間お休みしていた間に、人生の様々な問題を経験し、深い絶望感を抱くようになりました。精神的に最もひどく落ち込んでいた時期に、まずホームティーチャーが愛と友情の手を差し出しました。次いで監督、そしてワード部の会員たちが温かく迎えてくれたのでした。こうして彼は再び教会に活発に集うようになり、批判やわだかまりもなく自分を受け入れてくれる会員たちの温かい心に触れる中で、イエス・キリストの福音が真実であり、悔い改めた人はいつでも快く迎えられるということを知りました。主は赦しを与えてくださいます。神に真に従う人々も赦しの精神をもって迎えてくださいます。友情の手が差し伸べられ、罪人が悔い改め、こうして愛の輪が完成するのです。

予言者モルモンも次のように教えています。「それであるから私の愛する兄弟らよ。

愛はいつまでも消え失せることがないから、あなたたちにももしも愛がないならあなたたちは空しい者である。ほかのものはみな消えてなくなるものであるから、すべてにまさる愛を固く守れ。この愛はキリストの純粋な愛であって永遠につづくものである。従って終りの日にこのような愛を持っている人はさいわいである。」(モロナイ7:46-47)

私たちが心に希望を持ち、キリストの純粋な愛を抱いて、教会における管理の職を果たせますように。また、神の王国に私たちを迎えようとしておられる救い主に愛を示すことができますように。心の思いがそのまま行動に現われることを思い起こし、自分たちの胸を希望と愛とで満たすことができますように。そして、あらゆる時代の人類に語りかける救い主の招きか、次の賛美歌とともに響きわたるように願っています。

主に來たれ 重荷負い
罪にまけし者よ
主をたよる 者をみな
天へと導きまさん
主に來たれ 闇の中
迷うとも主、守らん
主の愛は 汝見つけ
闇より導かん
(『主に來れ』讚美歌81番)

チャーチニュース

「中国の門戸はいつ開放されるだろうか。」大管長会の指示により最近中国を訪問したラッセル・M・ネルソン長老とダリン・H・オークス長老は、この問いにははっきりとこう答えている。「中国の扉はすでに開かれています。」

現在、宣教師を派遣するという意味での伝道計画はないが、北京、上海、西安には、合衆国などで教会に入った多くの中国人会員がすでに支部を設立している。

ふたりの使徒は滞在中、中国国際文化交流センターの招きを受け、8日間で22の会



中国における宗教の自由

● 李先念・人民政商會議主席、前国家主席(右端)と会談するラッセル・M・ネルソン長老

合に出席した。中でも特筆すべきは、前国家主席、李先念・中国人民政治協商会議主席との会見である。李前国家主席は、中国政府の意向として教会に敬意を表し、教会員を保護する旨を明らかにした。また、この会見の様子はテレビ中継された。さらにふたりの使徒は、彭沖・全人代常務副委員長および中国国際文化交流センター理事長主催の人民大会堂での晩餐会にも招かれ、中国政府指導者の温かいもてなしを受けた。

ふたりはこのような会談を通して、中国は諸外国との交流を望んでいると判断し、宗教活動を自由に行なえるとの認識を得た。

中国では宗教活動が禁じられているという考えは誤りである。宗教の自由は憲法でも保障され、実際に寺院や教会が至る所にあり、宗派間には豊かな協調精神が見られ

る。一般社会の風潮としても、入学や就職の際に宗教的差別はまったくない。また、伝道は法律で禁止されているが、宗教に関心のある人の質問に答えることは認められ、個人が教会に入り、教義に従って生活することは自由である。

ふたりの使徒はこれらの状況から判断しても、中国で教会が発展する可能性は非常に大きいと強調する。ネルソン長老は、心臓外科医として過去3回中国を訪れ、現在3つの大学の名誉教授として活躍している。今回も大学関係者および政府教育関係者などと会見し、中国とユタ州の医学界の交流に尽力した。

ふたりの使徒に随行し、政府高官との会見のお膳立てをしたのは、ハワイのPCC（ポリネシアン文化センター）前所長ラル

フ・G・ロジャース Jr.兄弟である。中国の旅行会社の社員がBYUハワイ校へ留学し、隣接するPCCで働く機会を得るなど、BYUおよびPCCは、中国との交流に積極的な役割を果たしている。

ネルソン長老はこう語る。「教会員として知っておくべき法律もいくつかあります。法律を理解していれば、その枠内で中国の会員たちは教会を運営することができます。私たちはどの国でも、良心的な市民として国法を支持し守るように、信仰箇条第12条で教えられています。中国の教会員にもこの教えに従うように教えるつもりです。

中国でも教会員は、勤勉、正直、質素などの諸徳を具えた立派な市民として知られています。」

各地のたより

ワード部/支部特集⑧

仙台ステーキ部

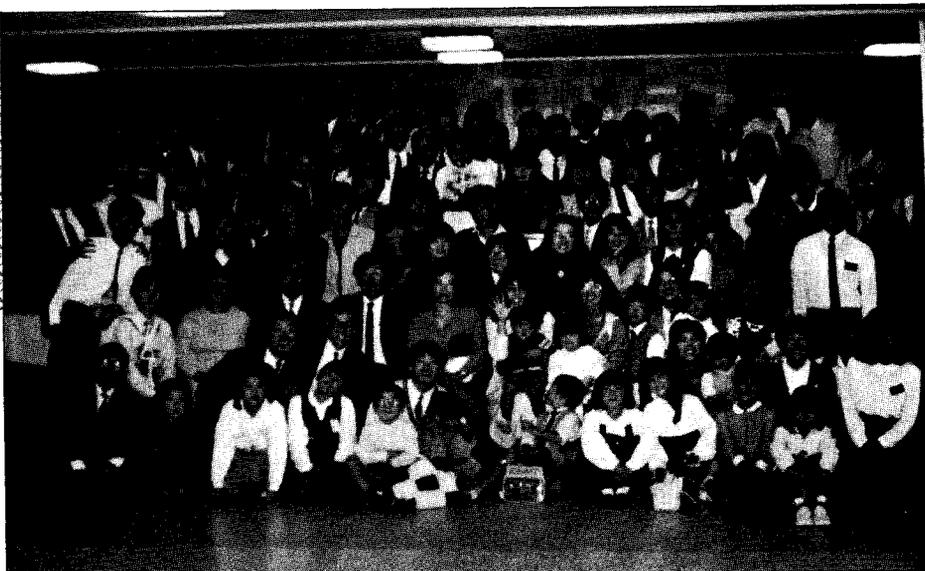
長町ワード部

長町ワード部の紹介



高 登
鈴木謙司

杜の都仙台のはずれにある長町。古いたたずまいも多く、ちょっと足を延ばせば田園風景が広がる、そんな素朴な街。その一角に、長町ワード部があります。現在115名ほどの活発な会員が集っています。以前は家族が多く、子供たちもたくさんいたこの長町ワード部も、近年では独身成人の数が増えてきました。そのうえ子供たちも成長して青少年と呼ばれる年代となり、若い会員が中核を占めるようになりました。今から6年前に建てられたプレハブの礼拝堂も現在では手狭になり、クラスルームも不足してきました。今私たち長町ワード部



会員の最大の望みは、防音のしっかりした教会堂を一日も早く持つことです。そのため私たちは、伝道と活発化に重点を置いて、多くの方々に教会に導けるよう一致して進んでいます。

「常に前進」をモットーとして、そしていつも元気で、明るく、楽しい教会生活を送れるよう、会員一同頑張っています。(すずき・じょうじ 1956年生まれ、長町ワード部監督(1988年12月現在))

我が家で 早朝セミナーを



山岡 洋子

娘が中学3年生になり、セミナーに出席することになりました。長町ワード部も今年(1988年)から早朝セミナーを行なうことになりましたが、困ったことに早朝の交通手段がありません。教会へ行ってから学校へ行くのではとても間に合わないのです。そのため自宅ですることになりました。教師は、母親である私です。

毎週月曜から金曜の、早朝6時15分から7時まで。教師も生徒も初めての体験でした。最初は、一対一で、しかも早朝にやるのだらうかとの不安もありましたが、神権者がふたりと高校3年生の兄弟ひとり、そして私の下の娘(小学校4年生)も参加することになり、楽しくスタートしました。

私の夫は教会員ではありませんが、私が改宗してからの8年間、ずっと理解を示し協力してくれました。その主人も最初は、1カ月も続かないだろうと言いながら、自宅を提供してくれました。その言葉に負けまいと、私たち早朝セミナーのメンバーは頑張りました。中でも眠い目をこすりながら、雨の日も風の日も自転車で15分か

てやって来る高校3年生の兄弟の、懸命な姿を見て、夫はこう言いました。「みんなよくやっているな。1カ月間やめずにできたらプレゼントをあげよう。」

そして1カ月後、私たちはひとりずつ、夫からノートとペンをもらいました。主人は、たとえ自分の考えとは違っていても一生懸命努力する人が大好きなのです。

セミナーはどんどん進んでいきました。今年の学習課程は旧約聖書で、マスター聖句もむずかしく、覚えるのに苦労しました。そこで全員で声を合わせてテープに吹き込み、何度も繰り返し練習したりしました。

この早朝セミナーは私にとって多くの知識を得ることのできた場であり、自分の弱さとの戦いの中で神様への信仰をいかにして表わすかという試しの場でもありました。特に、自営業の夫を手伝いながら毎日のレッスンの準備をするのはなかなか大変なことでした。しかし、神様はすべてをご存じのうえて、私にこの責任を与えてくださったのです。生徒はいつもこのようにお祈りしてくれました。「このセミナーの勉強がよく理解できて、学校や家庭で実践できるように助けてください。」私も、この早朝セミナーで学んだことが生活の中に実践されてこそ真の成功が得られることを、確信しています。(うちやま・ひでこ 1950年生まれ、扶助協会第一副会長)



寮生としての セミナー

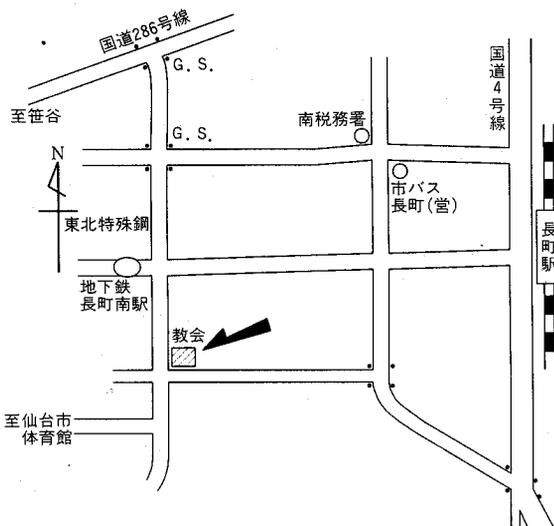


高橋 千恵

早朝セミナーが始まってから、前よりもセミナーに参加する人が増えたようです。私も早朝セミナーに参加したいのですが、寮生なので出席できずとても残念です。一応、寮でテキストを個人で勉強して、あとで先生にみてもらうという形をとっています。

課題学習をきちんと学べば霊的な思いが持てますが、やはり誘惑が多く、あとでやろうかなどと考えてしまいます。試験のときやほかの用事で忙しいときも、やはりセミナーを優先することのむずかしさを感じます。早朝セミナーも毎朝早く大変ですが、毎日教会へ行くことで心が清くなり、霊的な一日を過ごせるのではないのでしょうか。

学校が休みのときなど、たまに早朝セミナーに参加しますが、朝のすがすがしい空気の中で、とてもよい気持ちになります。そんなとき、早朝セミナーを受けられる人たちのことがうらやましく感じられます。でも、これも私に与えられた試練であって、それを乗りきるためにセミナーがあるのですから、さらに天のお父様の娘としてふさわしくなるように、これからも頑張っていきたいと思います。(たかはし・ちえ 1971年生まれ、音楽指揮者)



●全国各地のワード部/支部をご紹介しますコーナーです。



部活とセミナー



志村 洋子

今年(1988年)の3月に、監督さんとセミナー教師の兄弟が、4月からのセミナーについての説明をするために

1989年5月の大管長会メッセージ

「われと同じ業に働く僕らよ」

第一副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

ある日、私はペンシルベニア州ハーモニーを流れるサスケハナ河に行きました。木立ちの中を通り抜けていくと、やがて川辺に出ました。私は1829年5月15日にそこで起きた驚嘆すべき出来事に思いをはせました。

当時23歳のジョセフ・スミスは、エマ・ヘールと結婚したばかりで、彼女の両親が住むハーモニーにいました。そこへ学校の教師をしていたオリヴァ・カウドリが訪ねてきて、モルモン経翻訳の仕事の書記として働きたいと申し出ました。かくして、ジョセフが口述し、オリヴァが筆記するという形で翻訳が進められていきました。

5月のサスケハナ河畔は美しさに満ち満ちています。木々は春の若葉を茂らせ、わずかに咲き残った花の姿も見受けられます。そして川は雪解け水を満々とたたえて流れています。

ジョセフとオリヴァはモルモン経の翻訳を進めていく中で、罪の赦しを得させるバプテスマという記述にぶつかりました。ふたりはバプテスマについて語り合い、いろいろ思いめぐらしたのではないのでしょうか。そして、だれがバプテスマ

の儀式を行なう権能を持っているのか、それはどのようにして執行されるのかと疑問に思ったことでしょう。ふたりはどうしても確かな答えを得たいと思っていました。そして、どちらかひとりが、「主にお伺いしよう」と言ったのです。

ふたりは家を出て、人里離れた森へ分け入り、そこで祈りを捧げました。

オリヴァの語るところによれば、ふたりが祈りを捧げているときに、贖い主のみ声が聞こえてきました。驚いて目を開けたふたりは、輝く雲に包まれたひとりの天使が天下る姿を見ました。そして、その天使はふたりに語りかけてきました。

「自らは新約聖書に見ゆるかのバプテスマのヨハネと同一人なり、と言える一人の天使なり。[また]メルケゼデクの神権と呼ばれる大神権の鍵を持ちたる古えの使徒ペテロ、ヤコブおよびヨハネの指揮の下に役を勤むる者なりと断言せり。」

天使はふたりの青年の頭に手を置き、次のように言って神権を授けました。

「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈む

るバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適うて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」(教義と聖約13)

そしてこの天使は、「このアロン神権は按手によって聖霊の賜を与える権能を有ってはいないが、かような神権は後から」授けられると言い、さらに、バプテスマを受けよと命じ、ジョセフが先にオリヴァにバプテスマを施し、そのあとでオリヴァがジョセフにバプテスマを施すようにと指図しました。(ジョセフ・スミス 2:70)

ふたりは水辺に下りていきました。私には実際にその場に居合わせたかのように、そのときの様子を思い描くことができます。ふたりは、復活して天使として現われたヨハネの指示に忠実に従いました。最初にジョセフがオリヴァを川の水の中に沈めてバプテスマを施し、次にオリヴァが同じようにしてジョセフにバプテスマを施しました。そのあとで、ジョセフは、先にヨハネがしたと同じように、オリヴァの頭に手を置き、彼にアロン神権を授けました。そしてそれが終わると、

今度はオリヴァがジョセフにアロン神権を授けたのです。

私は、この2度目の聖任はどうしても必要なものではなく、ひとつの教えを強調するためになされたものであると考えています。ふたりはすでにヨハネから権能を授けられていましたが、この2度目の聖任を通して、神権の授与はバプテスマの後に行なわれるべきこと、また神権授与の範式が確立されたことを教えられたのです。

この神権の授与に際してヨハネが用いた言葉はごくわずかです。私たちがアロン神権をほかの人々に授けることがあります。ほとんどの場合、これとは比較にならないほど多くの言葉を用いているのではないのでしょうか。しかし、ヨハネの場合は、数は少なくとも、重要な言葉だけを語り、それを通して、不可欠な要素をすべて満たした範式を確立したので

す。ヨハネがふたりに授けた権威は、彼がパレスチナでバプテスマのヨハネとして知られていた当時を持っていたのと同じ権威でした。イエスもヨハネのもとに来て、ヨルダン川の水でバプテスマを受けられたのです。

ヨハネは並外れた人物でした。イエスは彼について、「女の産んだ者の中で、ヨハネより大きい人物はいない」(ルカ7:28)と言われたことがあります。

私にとって、ヨハネがジョセフとオリヴァの頭に手を置いたのは、非常に意義深いことに思えます。これは、福音の回復の歴史の中で、接手が行なわれた例として記録に残る最初のものです。ヨハネ

が復活体をもって現われ、賜を授けるためにふたりの頭に「手」を置いたのは、非常に意義深いことではないでしょうか。肉体を媒介として、神聖な権威が授けられるのです。よりわかりやすい言い方をすれば、手から頭へという経路を通して、神権を持っている人から受ける人へ、その権威が流れていくということです。

ヨハネは「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ」と言いました。彼がこのとき「汝ら年若き者」などという言葉遣いをしなかったことにも、心に強く感ずるものがあります。「われと同じ業に働く僕らよ」という言葉は、ヨハネが自分とふたりを分け隔てなく同等に考えていたことの表われです。ヨハネはこの重要な機会を通して、教会には隷属的な主従関係は存在せず、神権者は皆、その権威の源である永遠の神のみ業のために働く同等の僕であるという原則をきわめて明確にしました。人間には貧富の差、肉体の強弱の差、肌の色や背丈の違いなどがあります。また、高い教育を受けた人もいれば、ジョセフのようにそれほど教育のない人もいます。しかし、神権に関していえば、これらの違いには何の意味もありません。大切なのは、一人一人が神権にふさわしい生活をするかどうかです。このような意味で、ヨハネが最初に口にした「われと同じ業に働く僕らよ」という言葉は非常に意義深いものです。このみ業の歴史の中に偉大な足跡を残した人々の中には、貧しい人、高い学校教育を受けなかった人、外見的に特に目立つものを持っていなかった人など、様々なタイプがあります。しかし重要なのは、彼らが神権を受

け、行使するにふさわしい人物であると認められたことです。

ヨハネは次に、「救世主の御名によりて」と言いました。ヨハネはこの神権時代における最初の聖任の儀式において、私たちにもうひとつの範式を示しています。通常、私たちが神権の聖任の儀式を執行するとき、「救世主の御名によりて」という言葉遣いはしません。同じ意味の「イエス・キリストのみ名によって」という言葉を用いるのが普通です。いずれにしても、神権による働きはすべて神の御子にして救い主なるお方、すなわちイエス・キリストのみ名によって行なうことを忘れてはなりません。私たちが神権者として働き務めているのは、世の贖い主のみ業なのです。

イエス・キリストのみ名は神聖なものです。不敬な用い方をすべきではありません。神のみ名を汚すのは、由々しい罪です。神の命ずるところにより、イエス・キリストのみ名は、この教会の名称にも用いられています。イエス・キリストのみ名は、ほかのいかなる名前とも異なるものです。なぜなら、それは全人類を超越したお方の名前だからです。キリストは、地上の人間を母とし、永遠の神を父として、この世に生を受けられました。そしてご自身の内に秘められた神聖な力によって、死を克服し、墓を出て、すべての人に救いをもたらしました。

どのような場合であっても、主のみ名をみだりに唱えてはなりません。いついかなるときも、厳粛な思いと畏敬の念をもって用いてください。

ヨハネは次に、「われ汝らにアロンの神

権を授く」と言いました。アロンとは、このすばらしい権能と権威を授けられていた古代イスラエルの人物です。ヨハネはさらに続けて、これは「天使の導きと恵み〔の〕鍵を握る神権」であると言っています。この鍵とは何でしょうか。これは、すばらしい特別な祝福が授けられるよう、その扉を開く権威を表わしている言葉です。その祝福の中に、「天使の導きと恵み」も含まれているのです。アロン神権者は皆、ふさわしい生活をしているなら、天使の導きと恵みを受けることができるという特権を与えられています。これは、み守り、導き、慰め、励ましが与えられるよう、神の力を求めることができるということです。私は、「天使の導きと恵み」というヨハネの言葉は決して空しいものではないと信じています。ヨハネが授けたのは、お金では買えない貴重な財産であり、それにふさわしい生活をし、熱心に求めるすべてのアロン神権者に与えられるものではないでしょうか。

次にヨハネは「悔改めの福音」という言葉を用いています。主はこの神権時代の初期に、人々に悔い改めを促す以上に大いなる責任はないと明言されました。これは、悪を捨て、正しいことに心向け、永遠の福音の真理にふさわしい生活をするよう、人々に勧める責任です。私はアロン神権を持つすべての青少年が伝道に出る計画を立て、宣教師となるように望んでいます。そして彼らが、大いに努力して、悔い改めを説くように願っています。しかし、ただやみくもに人々に悔い改めを叫べという意味ではありません。福音の原則を聞く人々に、生活を変

え、過去の罪を捨て、いつまでも神に忠実に生きたいという望みを起こさせるような教え方をしてほしいと願っています。

さらにヨハネはふたりに対して、この神権とともに罪を赦すために水に沈めるバプテスマを施す権能を授けると告げました。

主は後の啓示の中でも明らかにしておられますが、バプテスマは死と埋葬と新しい命へのよみがえりの象徴です。過去の罪が赦される、つまり忘れ去られるということです。なんとすばらしいことではないでしょうか。バプテスマの水から出るとき、人は汚れも傷もなく、主の目になかった者となります。そして、罪を犯すことなく生きていくという決心のもとに、新たな生活を始めるのです。

この神権に聖任されていない人は、正当な権能によるバプテスマの儀式を執行することはできません。

私たちが毎年5月15日前後にアロン神権回復記念行事をするのは、何の不思議もありません。記念するにふさわしい重要な出来事なのです。アロン神権回復記念行事は、ひとたび失われた神聖な権能が、決して再び取り去られないという約束とともに、地上に回復されたことを祝う行事です。

私は、この権能の力を理解し、目の当たりにしてきた者として、またみたまの声を実際に耳にしたひとりとして、これらがすべて真実であることを、イエス・キリストのみ名により証します。アーメン。□

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. アロン神権は、復活体をもって現われたバプテスマのヨハネにより、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに授けられた。
2. ヨハネがジョセフとオリヴァに授けた神権の権威は、彼が昔、救い主にバプテスマを施したときに用いたのとまったく同じものである。
3. アロン神権の回復により、バプテスマというすばらしい賜がもたらされた。バプテスマは過去の罪の赦しを得させるとともに、神のみこころになかった生活をする決意を表明する機会でもある。

話し合いを進めるために

1. この神権時代に神権が回復されたことについて自分の気持ちを述べる。神権について理解していることを話してもらう。
2. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておく必要はないだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。

「わたしの小羊を養いなさい」

目的：フェローシップの大切さを理解する

救い主は復活された後に、ガリラヤ湖の岸边で使徒たちと食事を共にされました。食事が済んでから、イエスはペテロに、「あなたは……わたしを愛するか」と言われました。(ヨハネ21：15)

救い主はペテロに、「あなたはわたしを愛するか」と3度お尋ねになりました。そしてペテロは3度「愛しています」と答えましたが、その都度救い主に「わたしの小羊を養いなさい」「わたしの羊を養いなさい」と言われました。

私たちがこれらの言葉を深く心に留めなければなりません。ペテロがガリラヤ湖畔で学んだように、確かに主の「羊」を「養う」のは、私たちに与えられた神聖な義務であり、使命です。

中央扶助協会会長バーバラ・W・ウィンダー姉妹が、母親を亡くしたある姉妹について話をしたことがあります。彼女が悲しんでいることを知ったある友人がいました。その友人は、なんとか力づけてあげたいと思いながらもどうしてよいかかわからず、結局主に祈りました。すると、「ただ行くだけでよい」という答えが与えられました。

友人の訪れは、彼女に慰めを与えました。そしてふたりは一緒に祈りました。後に、悲しんでいたその姉妹は、友人が訪ねてきてくれたおかげで、自分が本当に必要としていた心の安らぎを得たと話したそうです。

私たちは皆それぞれに重荷を背負って生きています。家庭の中に、あるいは個人的に深刻な問題を抱えている人もいます。また病気、心身障害、経済的な問題で苦しんでいる人もいます。孤独な人、

小さな子供の世話で押しつぶされてしまいそうな人、夫や子供がなく人生に空しさを感じている人など、実に様々です。

私たちは、「互いに苦難を軽くするために喜んで助け合う」よう命じられています。(モーサヤ18：8)確かに、人の重荷を軽くするよう助けることにより、自分の苦しみが軽くなったり、その苦しみについて正しい理解が得られるようになることも多くあるのです。

ウェンディーとジェームズも、最初に生まれた子供がダウン症であると知ったときには、悲しみに打ちひしがれてしまいました。やがてふたりは天父の愛に疑いを持ち、人の目を恐れて、教会や人々との交わりを避け、最後には夫婦の関係にもひびが入るようになりました。

隣にマーガレットが引っ越してきたのは、ウェンディーが最も沈みこんでいたときでした。何年前かに子供を亡くしたマーガレットは、少しずつウェンディーの悲しみを理解していきました。そして、ウェンディーが自信を取り戻せるように助けを与えました。その自信こそ、彼女が悲しみから抜け出し、教会に戻り、夫と子供を愛し、受け入れるようになるためにぜひとも必要なものだったのです。

私たちは愛を与えることによって、より多くの愛を与える力を増し加えていくことができます。また、主の「羊」を「養う」人は、平安と喜びという食物により豊かにあずかれるようになるのです。□

訪問教師への提案

1. どうしたら、ほかの人の必要をよく

理解できるようになるか、また助けを与えるための時間をつくれるようになるかについて話し合う。

2. 苦しむ人を助けた経験や、逆に助けてもらった経験について話し合う。訪問先の姉妹にも、そのような経験について話してもらおう。関心を向け合うことによって、互いにどのように助け合うことができるかについて話し合う。(「家庭の夕べアイデア集」pp.108-11, 106-26参照)

「聖徒の道」発刊遅延の おわびとお知らせ

「聖徒の道」をご愛読くださり、心から感謝申し上げます。

諸般の事情により、「聖徒の道」の発刊が大幅に遅れておりますことを深くおわび申し上げます。今年度の今後の発刊予定は以下のようになっております。何とぞ、ご了承のうえ、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

発刊予定

1989年4月号	1989年5月12日
1989年5月号	1989年6月9日
1989年6月号	1989年6月28日
1989年7月号	1989年7月28日
1989年8月号	1989年8月11日
1989年9月号	1989年8月25日
1989年10月号	1989年9月25日
1989年11月号	1989年10月25日
1989年12月号	1989年11月25日

私の家に来られました。そのときに初めて早朝セミナーについて聞きました。父は、「大変かも知れないけれど、やってみなさい」と言いましたが、小さいころからあまり丈夫な方ではない私は、どこまで続けられるか不安でした。そのうえ、高校受験を控えているので勉強の方も心配でした。

セミナーが始まってから一番つらかった時期は、所属していた運動部の、中学校での最後の大会があった6月ごろでした。普段はセミナーが終わるといったん家に帰るのですが、7時半からの早朝練習に出

るためには、そのまま直接学校に行かなければなりません。そして放課後は夕方6時まで練習です。家に着くころには疲れて何が何だかわからなくなることもありました。両親に「大会が終わるまでセミナーを休みたい」と言うと、「そんなことで休むなんて」と叱られてしまいました。でもよく考えてみると、神様のことより自分のやりたい方、楽な方を選んで自分の甘さに気づきました。

私は、セミナー・勉強・部活、をきちんとこなせるよう祈りました。すると前日

の練習がきつくても、朝はきちんと起きられるようになり、大会前の2、3週間もセミナーに通い続けることができました。今思い出してもとても不思議です。きっと神様が私を助けてくれたのだと、心から感謝しています。また家族の助けにも感謝しています。

セミナーの課程をすべて終了するにはまだまだ時間がかかりますが、これからも学校と両立できるように頑張りたいと思います。(みあけ・たみこ 1973年生まれ、マイアメイドクラス第一副会長)

〈大阪・名古屋地区大会開かる〉

地区代表 中村晴兆

2月18日(土)・19日(日)の両日、十二使徒定員会会員のM・ラッセル・バラード長老管理の下に、大阪・名古屋地区大会が開かれた。大会にはバラード長老ご夫妻をはじめ、七十人定員会会長W・グラント・バンガター長老ご夫妻、アジア地域会長会アドニー・Y・小松長老ご夫妻らが出席された。大会では、まず18日(土)に午後2時から4時間にわたり、大阪北ステークスセンターにて神権指導者会が開かれた後、翌19日(日)は午前10時から神戸ワールド記念ホールにおいて一般大会が盛大に行なわれた。

土曜日の神権指導者会は、大阪、大阪北堺、神戸、名古屋、名古屋西の各ステークス部、神戸、大阪、名古屋の各伝道部、北陸、三重、福知山の各地方部の神権指導者と、現在ある9つの伝道部の伝道部長全員が出席し、バラード長老の管理の下に非常に霊的な雰囲気の中で会が進められた。

バラード長老、バンガター長老、小松長老は1960年から1986年の26年間にわたる日本の末日聖徒イエス・キリスト教会の発展状況をグラフによって示し、留意すべ

き点をいくつか明らかにされた。まず、8万人以上を数える会員の中で聖餐会に活発に出席している人数は、わずか1万7,000人前後にとどまっていること、また、活発なメルケゼデク神権者の出席人数はこの26年間、ほとんど変化がなく低迷していることを指摘された。すなわち会員の約80パーセントがお休み会員であり、大量の不活発神権者を産み出しているということである。

また、現在日本の9伝道部において、伝道活動に日本円で年間約11億円が費やされており、改宗者ひとりにつき約40万円の伝道経費が必要な日本は、世界一伝道に経費のかかる国であることをつけ加えられた。

日本は、世界有数の経済大国となり、教育水準においても世界一のレベルに達しているが、なぜかそれに見合う教会の発展が見られないということも指摘された。

そして、日本において主の教会がもっと力強く発展するためには、「きょう学んだことを実際に行なうべきである」「これまでやってきたこととは違ったことを行なうと決心しなければならない」との勧告を与えら



れ、参加した各指導者一人一人が過去に経験したことのないほどの霊的導きを受けて集会は終わった。

翌2月19日(日)の一般大会は約3,600人の会員が出席する中、バラード長老管理の下、小松長老の司会で霊的に始められた。小松長老は、教会の使命を達成することの重要性を繰り返し強調された。バンガター長老は神殿の神聖さとその重要な役割、そして両親は神殿で結び固められ、子供たちに正しいことを教え、家庭を治める神聖な責任があるとの勧告を与えられた。そして最後にバラード長老は、ご自身の経験を通して「みたまの導きに従うことができるような生活をするように、ふさわしく生きてほしい」と話され、「教会幹部だからそれができるのではなく、ふさわしく生きようと努力するときには必ず聖霊の導きがあり、会員であれば、老若男女を問わず、だれにでも天父は語りかけてくれる」と証された。

そして家族にあっては、良き父、母、夫、妻となり、互いに尊敬し合い、助け合って生活するよとの勧告がなされ、出席したすべての人々に深い感銘と力強い霊的導きを与えて、会は閉じられた。(なかむら・はるよし 大阪・名古屋地区担当地区代表)



末日聖徒の家庭に生まれ育って

神戸伝道部専任宣教師 松下まな美



●松下まな美姉妹（中央）

すべての人が神様の存在を知っているわけではないと知ったとき、私は子供ながらにとても複雑な気持ちでした。

末日聖徒の家庭に生まれ育った私にとって、神様は信ずるというより、生活の中でなくてはならない存在でした。また教会に行くことは、食事や睡眠をとることと同じように、生活の一部として必要不可欠なものでした。しかし、成長するにつれ、福音を知らない人々がたくさんいることを知り、伝道の大切さに気づいたのです。

我が家では私が小さいころからよく宣教師を招いて、食事を共にしていました。私にとって宣教師はあこがれであり、またなぞに包まれている存在でもありました。なぞというのは、よく食べることで靴下に穴があいていることでした。よく食べることは何とか理解できましたが、靴下の穴やズボンのすりきれとなると、まさになぞでした。「どうして穴のあいたままにしてるんだろう。どうしてすりきれるほど自転車に乗るんだろう……。」子供ごろにいつもそう思ったものです。

そんな私が宣教師になりたいと思い始めたのは、小学校の低学年のころでした。しかし、中学、高校と進学するにつれ、福音を伝えるのはそんなに簡単ではないこと、また、福音に添った生活をするときえ、たやすくはないことを知りました。今青少年の年齢にある人たちと同じように、私への試しのひとつが安息日の戒めでした。

私はスポーツが大好きで、高校生のときには体操競技に夢中になっていました。そのため、試合を前にするといつも安息日の問題が出てきました。たびたび祈りました

が、状況は変わりません。あきらめきれずに母に相談すると、母は、「よく考えて、自分で決めなさい。でも決めたことはちゃんとお父さんに話してね」と、予想どおりの答えでした。

私の両親はいつも子供たちの自由意志を尊重し、何が正しいか、主の喜ばれることは何かを、幼いときからはっきりと教えてくれました。もし頭ごなしに否定されていたなら反抗していたかもしれません。私の性格をよく知っている両親は、「自分で決めなさい」の言葉とともに、子供に対する深い信頼によって導いてくれたのです。

私が安息日の戒めを守れたのは、両親が自由意志を尊重してくれたからだけではありません。両親の生きた模範があったからです。たとえ具合が悪くても、どんな用があるうとも、父と母は安息日を守りました。その姿が、ほかの戒めについても、子供たちにとって最もわかりやすい導きとなりました。もちろん、私は両親が完全でないことをよく知っています。両親も同じように成長している途中ですから、失敗もし、弱点もあります。でもどんなことにも最善を尽くす姿は、やはり私にとって何よりの模範です。

両親から学んだ教えのひとつに、福音を楽しむことがあります。中学・高校時代に私たち四姉妹は、メリーパインズというコーラスグループを作って、家族のすばらしさ、福音の喜び、神様の愛を音楽を通じて伝えようと活動してきました。その活動を通して、福音に対する私の証は揺らぐことのないものとなりました。家族は、救いに至るために助け合うべき存在であること、

福音は苦しんで耐え抜くものではなく、喜びと感謝をもって分かち合うものだ学びました。メリーパインズの活動を通して多くの人々と出会い、また、伝道に対する意識も高まりました。伝道前のすべての生活が、今の伝道生活のための準備であったと思います。

私の初めの任地は沖縄で、次が大阪北ステークス部です。私にとってこのふたつの任地は、メリーパインズの公演を行なった中でも最も印象的な場所です。ここに召されたのも主のみこころであると強く感じ、特別な地で働けることに心から感謝しています。

今、私の一番の夢は、私が育ってきた家族のような家庭を将来築くことです。この伝道生活は、その夢を実現するための大切な備えであると強く感じます。

この福音が真実であることを心から証します。神様が生きておられ、イエス・キリストが救い主であることを証します。この福音はどんなに苦しい思いをしてもどんなに犠牲をはらっても守り抜く価値のある、唯一の宝です。そして家族は永遠です。(まつした・まなみ 東京北ステークス部中野ワード部出身)

編集室から

《原稿を募集しています》

◆各地のたよりの原稿を常時募集しています。投稿の際、原稿には必ず連絡先(電話番号)と教会での責任(役職名)、生年

月日を記入し、写真を同封してください。お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますのであらかじめご了承ください。

◆お詫びと訂正：本年度2月号ローカーページ(p.122)、吉岡里美姉妹の名前は吉

留里美(よしどめ・さとみ) 姉妹の誤りです。深くお詫び申し上げます。

◆あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 Tel.03(444)5264

12月に召された JMTTC 第115期生10人の名簿

後列左から1～7 前列8～10



S：ステーク部，D：地方部，W：ワード部，B：支部

- | 《名 前》 | 《出身地》 | 《伝道地》 |
|----------|------------|--------|
| 1. 小又やよい | 仙台S/山形W | 東京北伝道部 |
| 2. 山田雅子 | 東京西S/八王子W | 大阪伝道部 |
| 3. 慶久正喜 | 名古屋西S/御器所W | 岡山伝道部 |
| 4. 阿部 浩 | 町田S/湘南W | 神戸伝道部 |
| 5. 阿部敏和 | 仙台S/長町W | 東京北伝道部 |
| 6. 佐藤絹代 | 郡山D/郡山B | 神戸伝道部 |
| 7. 彼末さとみ | 鹿児島D/宮崎B | 神戸伝道部 |
| 8. 蛭田陽子 | 静岡S/沼津B | 札幌伝道部 |
| 9. 松田 恵子 | 町田S/町田第1W | 札幌伝道部 |
| 10. 高橋佳子 | 札幌西S/新琴似W | 大阪伝道部 |

1月に召された JMTTC 第116期生11人の名簿

後列左から1～6 前列7～11

S：ステーク部，D：地方部，W：ワード部，B：支部



- | 《名 前》 | 《出身地》 | 《伝道地》 |
|-----------|------------|--------|
| 1. 松永敏徳 | 仙台S/上杉W | 東京南伝道部 |
| 2. 菅原久樹 | 東京S/ひばりヶ丘W | 大阪伝道部 |
| 3. 増田文雄 | 静岡S/静岡W | 仙台伝道部 |
| 4. 阿部 賢一 | 東京北S/越谷W | 仙台伝道部 |
| 5. 小嶋輝人 | 長野D/長野B | 札幌伝道部 |
| 6. 宮内 寛 | 大阪北S/高槻W | 札幌伝道部 |
| 7. 中島博美 | 札幌S/厚別W | 神戸伝道部 |
| 8. 近藤三枝 | 名古屋西S/一宮W | 神戸伝道部 |
| 9. 佐藤ゆきみ | 大阪S/天満橋B | 東京北伝道部 |
| 10. 亀田玉緒 | 東京南S/千束W | 岡山伝道部 |
| 11. 塚田 恵理 | 東京西S/八王子W | 名古屋伝道部 |

神崎良太郎兄弟（前東京東ステーキ部長） 地区代表に召される

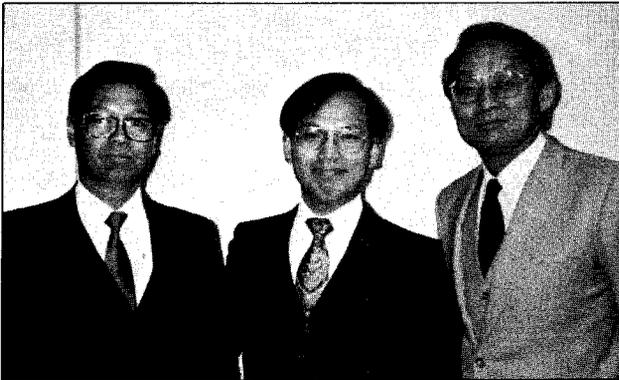
東京東ステーキ部のステーキ部長である神崎良太郎兄弟（49歳）は、1月12日、アジア地域会長会第一副会長のアドニー・Y・小松長老により地区代表に任命

された。
また、高松地区、広島地区、福岡地区、沖縄地区を担当していた相良長老が地区代表の責任を解かれ、神崎長老がその地区を担

当することになった。現在召されている5人の地区代表の担当は以下のとおりである。

- 井上龍一長老（札幌地区、仙台地区）
- 岡本亮長老（高崎地区、東京北地区）
- 浅間玄也長老（東京地区、静岡地区）
- 中村晴兆長老（名古屋地区、大阪地区）
- 神崎良太郎長老（高松地区、広島地区、福岡地区、沖縄地区）

新しく召されたステーキ部長会 広島・東京東



●左から住吉正博第二副ステーキ部長、上野敏幸ステーキ部長、成林孝治第一副ステーキ部長

広島ステーキ部

西原里志ステーキ部長の大阪伝道部伝道部長の召しに伴い、去る2月12日、十二使徒定員会会員M・ラッセル・パラード長老管理の下に行なわれた広島ステーキ部大会で、新たに上野敏幸兄弟（前ステーキ部伝道部長）がステーキ部長として召された。

第一副ステーキ部長に成林孝治兄弟（前高等評議員）、第二副ステーキ部長に住吉正博兄弟（前高等評議員）が召され、広島ステーキ部長会が再組織された。

東京東ステーキ部

神崎良太郎ステーキ部長の地区代表就任（1月12日）に伴い、去る2月5日、十二使徒定員会会員グリーン・H・オークス長老管理の下に行なわれた東京東ステーキ部大会で、新たに赤松成次郎兄弟（前ステーキ部伝道部長）がステーキ部長として召された。

第一副ステーキ部長に平野勝也兄弟（前高等評議員）、第二副ステーキ部長に斎藤和雄兄弟が召され、東京東ステーキ部長会が再組織された。



●左から平野勝也第一副ステーキ部長、赤松成次郎ステーキ部長、斎藤和雄第二副ステーキ部長

新役員の内命

12月4日から2月4日までに管理本部会員記録統計課に通知のあった役員の内命（敬称略）

- 札幌西ステーキ部苦小牧支部
新支部長：中村雅延（前任者：中嶋孝一）
- 釧路地方部釧路支部
新支部長：大貫和永（前任者：高木亨）

- 秋田地方部横手支部
新支部長：小松伸治（前任者：須恵耕治）
- 町田ステーキ部厚木支部
新支部長：柳原浩（前任者：今野和彦）
- 三重地方部伊勢支部
新支部長：作野研一（前任者：井村久方）
- 三重地方部松坂支部
新支部長：藤田哲生（前任者：工藤憲二）
- 岡山ステーキ部尾道支部

- 新支部長：井本則明（前任者：砂田博行）
- 山口地方部山口支部
新支部長：近藤成吉（前任者：高森弘志）
- 福岡ステーキ部八幡支部
新支部長：桜木裕二（前任者：池田和陽）
- 熊本地方部熊本支部
新支部長：石田廣智（前任者：柴田渡）
- 鹿児島地方部名瀬支部
新支部長：安田嘉也（前任者：牧哲也）

一同が食事をして居るとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、「取って食べよ、これはわたしのからだである。」

また杯を取り、感謝して彼らに与えて言われた、「みな、この杯から飲め。

これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。」

(マタイ26：26-28)
